



ヘルパーの 苦悩

LISA

はじめに

このお話は、私がヘルパーをしていた時の体験をもとにしています。

しかし、プライバシー保護の観点から、登場人物や家族構成などに関しては、大幅に私の妄想も入れて作成をしました。体験談風のお話は、フィクションであることをご了承ください。

1巻では、ヘルパー体験記を中心に書いていきます。

2巻、3巻では、体験をもとにして思うこと・・・、生活保護の方々の暮らしや、障害者の性欲介助、どう生きるか等々について書いていきたいと考えています。

それでは、ご縁があってこの本を開いてくださった方には、軽い気持ちで楽しんでいただけたら幸いです。

目次

癌を放置していた、Aさん（50代・女性）

ハムマンションのオーナー、Tさん（30代・男性）

Uさん宅では、激しく自己嫌悪（80代・女性）

Kさんの取り扱い方を、誰か教えてほしい（60代・男性）

Sさん宅で人生の終盤を想う（90代・女性）

ひろしの妻、Rさん（70代・女性）

Eさんには、5,000円盗ったと思い込まれ（60代・女性）

80歳で、両足を失ったFさん（80代・男性）

「癌」を放っておくとどうなるか、想像のつく方はいるだろうか。

疲れやすいとか、だるいとか、動けなくなってくるとか、全身機能の低下はまずあるだろう。または発症部位によって、腹水とかしびれ、飲み込みにくさなんかが出てくる場合もある。多くの方は、身体の不調を感じると病院で診てもらい、検査等をして、しかるべき処置（＝治療）を行うというのが、一般的な経過であると思う。けれどもなんだか調子が悪いと感じてはいても、病院には行かないで長い期間ほったらかしにしている人というの、もしかしたらけっこういるのかもしれない。

Aさんも、「ほったらかし」にしている人のひとりであった。

彼女は、乳癌。私が縁あってヘルパーとして介助に入るようになった時期は、今思えばもう末期のころだったんだと思う。

「乳癌」を放っておくとどうなるか、想像のつく方はいるだろうか。

Aさんは、病院嫌いなのか、数年前に乳癌と分かっても全く治療をしていなかった。切ったり取ったり（手術）が嫌だと言っていたような記憶もあるが、その辺はちょっと定かではない。いや、全く何もしていないわけではなかった。治療、いわゆる医学的な処置は拒否だったのである。

布団の脇のコタツの上には、数十種類のいわゆる「健康食品」が、いつもぎっしりと並べられていた。

民間療法、というのかな。

私が介助で入っていたころは、確かナントカキノコを熱心に飲んでおられた。そうして胸の患部にも、何かの液体を懸命に塗っておられた。

Aさんは、ひとつのものをずっと続けるのではなく次から次へと色々なものを試してしまうので、どれが効くのか効かないのか、なんだかもう、訳が分からなくなっている状態になってしまっていた。

民間療法も、自分は決して悪くはないと思うのだが。だからどれかひとつをずっと続けていたら、もしかしたらまた違った結果があったのかもしれないと思ったりもしていたのだが・・・

ところで、私が出会ったときのAさんの症状は、はっきり言ってかなりの衝撃であった。

目に見える、明らかな身体の変化があった。

胸の部分全体が、たくさんの腫瘍でおおわれている。

数cm大の、ピンク色のおできのようなものが無数、すきまなく広範囲にできており、胸のほとんどの皮膚の感じは、もはやどこにも残っていない。

乳首も、なし。

ほんとうに変な表現だと思うが、「ヌーブラ」をご存知だろうか。

当時ヌーブラという、肩ひもや背中ひもがない、胸の前面部分にピタッとはりつけるような感じのブラジャーが、一時流行っていたのだけれど。

胸部分全体の腫瘍が、どうも・・・「ピンクのヌーブラ」みたいだなと、不謹慎ながらも、自分はたびたび思っていたものである。

腫瘍はなんとなく、ゴツゴツとしていて硬そうである。そしてその各腫瘍からは、じくじくと常に体液やら血液が染み出していた。

ちょっとグロテスクな表現かもしれないが・・・。

しかしそうなるともう、ヌーブラのようなキレイなイメージではなくなる。

そしてその体液などをぬぐうのが、Aさんの日々の日課であった。

普段は患部をガーゼで覆っているのだが、すぐにびちょびちょになってしまうので、1日数回ガーゼ交換と、患部の清拭を行わなければならない。

交換時には、けっこう臭いもすごい。

何の臭いに例えたらいいか・・・、うーん、とにかく「具合の悪い人の臭い」。

さてここで、Aさんのヘルパーの登場。私の仕事である。

ガーゼ交換自体は、お手伝いはしない。ていうか、したくないしできない。

医療行為になるのか？は分からないけれど（ヘルパーは医療行為はやっちゃダメ）、そういう処置はAさんが好きこのんで行っていることなので、そこはもう勝手にやってもらうしかない。

もちろん、医師の指示なんかでもないしね。

ではヘルパーは、そのとき何をするのかというと。

ガーゼを渡してあげたりを多少することもあるんだけど、一番のお仕事は、「背中のおたため」

。

胸のガーゼ交換時にはAさんは、上半身裸となる。故に背中が寒い。

なので処置を行っている間中、適温に調節した蒸しタオルを、背中に当てて温めてさしあげるのだ。

タオルはすぐに冷めてしまうので、終わるまでの数分間、まめにせっせと取り替え続けなければならない。

Aさんの背後に回りスタンバイ。タオル2本、洗面器とバケツ。湯の入ったやかんと、水入りのペットボトル。それらをビニールの上にセットし、さあ緊張。

湯と水の加減には細心の注意を払い、“快適な温度の蒸しタオル”を用意するのは大前提。

交換のタイミングにも、常に神経を集中。冬場は特に頻繁。せっせと変える。

そしてAさん・・・、性格のことなどは後にも述べたいと思うが、このタオル交換時には、「あちい!」「つめたい!」と、大変にうるさいのである。

まあそんな調子なので、他のことに関しても多かれ少なかれヘルパーは皆、Aさんから何かしらで怒られるのは避けては通れない。

私が常勤のヘルパー（いわゆる正社員）として働くようになってから間もなくの、Aさんとの出会い。

ヘルパー事業所としては、「常勤でやるのなら、Aさん宅はできないとね」という、登竜門的な意味もあったのかもしれない。

そして確かに、Aさん宅を経験すると、その後どんな気難しい方を担当することになっても、たいていのお宅は何とかこなせるようになっていたように思う。

「Aさん宅に比べれば・・・」なんである。

そのくらいAさんのお宅は難しく、そうして変わった人であった。

そんなヘンテコな仕事であったが、それがいいのか悪いのかも分からず、まだ新米ヘルパーの私はとにかく必死で業務をこなしていくしかなかった。

Aさん（2）

介護保険では、やっていいこととダメなことがはっきりとしている。

本人に対しての援助ではなく「家族のために行う行為」や、「家族が行うことが適当と考えられる行為」は、ヘルパーはできない。

例えば 家族の分の食事と一緒に作るとか、ついでだから家族と本人の分をまとめて洗濯してしまうとか。

そういうのは、NG。あくまでも本人のための食事作りやら、洗濯だけを行うのだ。

「ヘルパーが行わなくても、日常の生活には支障がない」という事柄もしかり。

草むしりや車の洗車、ペットの世話。大掃除、窓拭きなど。

草むしりなんかは特に要望が多いのだけれども、頼みたい場合には介護保険のヘルパーを利用するのではなく、全額実費で頼むということになる。

ヘルパーは、生活を営む上で困っている面を支援するのであり、その費用は、9割は保険料と公費（税金）でまかなわれているというのが、できないことを厳密に決められている理由であると思う。

（本人は、かかった費用の1割を負担すればよい。）

草むしりは特に行わなくても、直接生活に支障があったり命に関わるというわけではないので、安い費用（＝ヘルパー）では行えないということである。

介護保険の手引き書とか、一般の人向けの資料には、こうしたことがハッキリと書かれている。ヘルパーの利用をしたいと思えば事業所と契約をする時も、そこはまず、必ず説明をされているはず。

介護保険のサービスは、原則65歳以上の、介護や支援を必要としている高齢者（認定を受けた人）が利用をできるもの。

一方、障害のサービスは、何らかの障害があるために日常生活や社会生活に相当な制限を受けており、障害者であると認定をされた人（障害者手帳を交付された人）が、利用をできる。

高齢者福祉サービスも、障害者福祉サービスも、「不自由だったり困っている面を援助」という部分は同じであり、障害福祉サービスも9割は公費でまかなわれていることなどからも、ヘルパーがやってはいけないことは、障害者の支援でも本来ならば決まりは介護保険に準ずるべきなのだろうが。

「高齢になって介護が必要になった方」と、「障害で介護が必要な方」というのは、実はその状態像は大きく異なっている。

障害のもつ特性であったり、個別性、『「継続的」に、生活に「相当な」制限を受ける人』の介助というのは、やはり介護保険法との完全な統合は難しいのだ。

以前、一時は「いずれ統合」と言われていたのだが、自立支援法が施行されたのち、当事者からの強い反発などもあって結局は「介護保険法と障害者自立支援法は統合はされない」という方向に変わっていったようである。

障害者支援の現場の方が、個々の利用者さんの状態に合わせたより臨機応変な対応が必要というわけだ。

ケースバイケース、まあまあまあという面が、実際の現場には少なからず存在している。

介護保険のお宅でも勿論そういう面もあるが、多分割合は、障害者支援の現場での方が多いだろう。

猶予というか。グレーゾーンということですか。

ちょっと話がそれてしまったが。

Aさんの場合である。

彼女は、『精神障害者』として、障害者支援ヘルパーを利用するという形で介助を受けていた。

Aさん（3）

「本人が裸の間は寒いので、蒸しタオルをせっせと取り替えながら、背中を温め続けてさしあげる」

なんていう仕事は、後にも先にも私はAさん宅でしか経験をしたことがない。

着替えの介助とか、全身清拭というのともまた違ったし。

それに裸になって本人が行っているのが、癌を放置していたために増殖している、胸部分の腫瘍の数々の処置というのでも……。なんとも珍しかったなあと回想する。

それとも全国のヘルパーさんの中には、同じような介助をしたことがある人というのもあるのだろうか？

Aさん宅以外で……。

Aさんの要望により、とにかくそんな不思議な介助をしていた。

Aさんが、精神障害者というくくりだったから、それが仕事として認められていたんだらうか。

しかし。

「Aさんは、精神障害者ではない！」というのが、一緒に介助に入ってしばらくAさんに付き合ってみた、同じヘルパー同士の中での共通認識であった。

精神障害というのでもまた複雑で大変難しいのだけれど、簡単に言うと、精神障害の代表的なものにはふたつある。

幻覚や妄想などの症状が特徴的な、「統合失調症」。

落ち込んでしまい死にたくなってしまうことの多い、「うつ病」。

Aさんは、「医者にかかって切ったり縫ったりされたら死んでしまう」という、思い込みはあった。

だから病院には行かず、自分で治そうとしていた。

その、どうやっても修正できない思い込みの部分が、「妄想」と判断されたのかしら？

一般的な常識なんかとはだいぶかけ離れているし、それにその、放置状態の胸の部分。そんなになってしまっても未だ、病院には行かない感覚。確かにずれてはいるのだけれど。

フツウの人だったら、もし自分の胸があんな状態になっていたら、耐えられないというくらいの症状であったのだ。

それをAさんは割りと冷静に、痛い辛いと言いながらも、観察をしたり、自分で淡々とガーゼで消毒をしたりしていた。

「こんなに進んでしまった」と言い、しょっちゅう記録を取ってもいた（胸部分を、自分で何枚も撮影）。

……ものすごく、変わった人ではあった。

やっぱりそれって、精神障害者ということでもいいのかな。

虫がたくさん見えるとか、自分の悪口が聞こえるとか、そういった幻視や幻聴等の症状は全くなかった。

過度に落ち込んでいたり、気持ちの浮き沈みが激しすぎるということもなかった。

頭はクリアなんである。

Aさん曰く、「精神障害者と認定をされていた方が、毎日ヘルパーさんが来てくれて色々やってくれるから、私はあえて障害者のフリをしている。その方が得よね」と。

得なのかどうかは分からない。

細かい性格で、あーしろこーしろとうるさい人だった。

やや潔癖症なところもあり、水のコップにフタをし忘れると激怒されたり、畳の拭き方なんかに細かい決まりがある。傷に響くからドタドタ動くなと言われ、Aさん宅では忍者のような動きをしていた（足音立てない）。

全く大変であった。

はっきり言って、Aさん宅に行く日には、ちょっと憂鬱になったりもしていた。

それでも、ヘルパーが来るのを待っているのは分かっているので、時間になると「こんにちは」とご挨拶をして、今日のご機嫌を伺う。

あんなに憎まれ口を叩いていても、結局は私たちが行かないとAさんは困るんだよなあ・・・、なんてことを、つらつらと考えながら。

お邪魔したとたんに、痛みで七転八倒していて、慌てて背中をさすったり声をかけたりする日もあり。

ぐっすり眠っている日もあった。

介助に入っている時間は、Aさんの具合には常に細心の注意を払い、アンテナを張りめぐらせている必要があった。

終わるといつもクタクタ。

それでも、私が介助に入るようになってから数ヶ月は、体調がいい時にはまだ自力で何とか動いていた。

あっためると調子がいいと、時々はお風呂に入ったりもしていた。

でもそのうちに、だんだん動けなくなってきてしまった。

Aさん（4）

癌の疼痛というのは 私たちには想像もつかないのだが、Aさんの痛がりようは壮絶なものであった。

悲鳴。泣き叫び。転げまわる。

そんな風な様子ときは、ヘルパーは相当慌ててしまう。

なんとかしてあげたいんだけど、なにもできない。

腰とか腕などをさすってあげたり、大丈夫、しっかりと声を掛けるくらいしか・・・。

そのうち叫ぶのにも疲れ果ててしまうようで、ぐったりとしてしまうことが多かった。

痛み止めの薬とか、注射とかを何度も進めたのだけれど拒否。何ヶ月も我慢をしていた。

お風呂までの移動ができなくなったので、布団の上での全身清拭を行うようになり

居室のすぐ脇のトイレまでの移動もできなくなり、布団の上でのオムツ交換介助を行うようになった。

全身のむくみも出てきていた。

終日布団の上で過ごすようになってからは、ちょっと朦朧としているような様子も増えた。

昔話も多くなり。

若い頃には、ヘルパーみたいな仕事もしたことがあるようであった。

ああ、だからかな、と思ったことがある。

Aさんは、ヘルパーが入っている間中 どんなに怒ったりうるさかったり無理難題を言ってきても、帰りがけには必ず私たちに「ありがとう」と言ってくれた。

神経質なAさんの気に入るような動きはなかなかできず、Aさんにとってはイライラとすることも多かったと思うんだけど。

ありがとう、っていう言葉がなかったら絶対もう行かないよねと、これもヘルパー同士での一致した見解。

昔ヘルパーみたいな仕事をしたことがあってこちらの苦労も分かるから、そういう言葉が自然に出ていたのかもしれない。

少し変な出来事もあった。

寝たきりになってからは、ウトウトとしていることがだいぶ多くなっていったんだけど。

布団の脇で清拭の準備をしながら、Aさんも私もなんとなく無言でいたときのこと。

壁にかかっていた、七福神の絵が描いてある掛け軸みたいなものが、ゆら～ゆら～と大きくゆれた。

風は、ない。

扇風機などもなし。

しばらくAさんと二人で、無言で見入ってしまった。

Aさん曰く、「お盆だから、ご先祖様が来たのね」と。

あっさりと話していた。あ～そっか、そんなもんかなと私もなんだかあっさりと納得。

同僚のヘルパーも、Aさん宅で似たような変な体験をしている。

半年ほど前に亡くなった その同僚のお母さんの直筆のメモ書きが、ふだんAさんやヘルパーが触ることのないちょっと奥の方の棚から、ふっと出てきた。

Aさんと、同僚のお母さんは勿論面識も何もないんだけど。

そのメモ書きはあとで私も見せてもらったんだけど、走り書きのような感じで「体には気をつけて」とかそんなようなことが書いてあった。同僚は、確かに母の字であるが何故にこんなものがAさん宅に？と、しばらくは不思議がっていた。

「お母さんが、あなたに何か言いたかったのね」と、Aさん。

同僚も、それを聞いてなんとなく納得。

Aさんが言うと、なんだか信憑性があるのだ。

靈感というのともちょっと違うんだけども・・・。

Aさんは、私が介助に入るようになってちょうど1年後に、亡くなってしまった。

最後の数ヶ月は激痛に耐えられず、あんなに嫌がっていたお医者さんのお世話になった。

訪問看護師さんや往診の先生に来てもらい、痛み止めの点滴や注射をしてもらっていた。

傷からの出血多量だったようである。

亡くなった日は、Aさん宅に一番長く入ってお世話をしていた、ベテランヘルパーさんの入る日であった。

Aさんが、そのヘルパーさんの日を選んで逝ったような気がしてならない。

涙はでなかった。

らくになってよかったですね、向こうではゆっくりしてくださいと、心の中でお別れをした。

Aさん（5）

Aさんのお話は、亡くなったので終わりではなく、実はまだ後日談がある。
不思議な話ですよ。

Aさんは独居の独り身だったのだけど、遠い親戚にあたるという姪御さんが、何かのときには多少は手伝ってくれていた。

そうして亡くなった、数日後のこと。

その、姪御さんのところに、他県の聞いたこともない△△寺から突然電話がかかってきた。

「△△寺の住職のものですけどね、今、Aさんが来ていまして、ここにお世話になりたいと言っています。失礼ながら、今Aさんのご遺体の方はどうなられていますか？」

姪御さんはこれからまさに、死後の諸々の手続きを進めるところであったのだけれど、決まりかけていた〇〇寺は慌ててキャンセル。急ぎよ、△△寺にお願いをすることに変更をしたのである。

。

Aさんはもう何年も外出はしていないし、そういう変わった人であったので、他者との付き合いも全くないようであった。

電話をすることもない。生前、自分が死んだらどこのお墓に・・・なんていう話も聞いたことはなかった。

死ぬ、ということ、全く考えていないような様子だったのである。

治る、と信じ込んでいたフシがある。治してみせると、自分で様々な健康食品を試したり、傷に色々なものを塗ったりと奮闘していた。

そうしていよいよもう無理かなという頃には、痛みで頭が朦朧としていることの方が多く、この先のことを思い煩う余裕もないようであった。

そうしてそのまま、逝ってしまったのだ。

けっこう離れた、その他県の△△寺を、生前にAさんが知っていたのかは謎。

しかし住職さんは、姪御さんの電話番号が何で分かったんだろう。

Aさんのことだから、きっと亡くなったあとに、自分の気に入ったお寺を探しにいったんだと思う。

そうして話の分かる住職さんに、自分のことをお願いするくらいことは、Aさんならばきっとやってのけると、ヘルパー一同はご冥福を祈りつつ、妙に納得をした出来事だったのである。

—終—

玄関に入ってまっすぐ行くと、つきあたりには「ハムスターのマンション」がある。

ハムスターは通常は、ケージというのかな、鳥カゴのようなおうちで暮らすのが一般的であり、そのお宅にはケージもいくつか、別室にあるにはあったんだけど。

ケージに入りきらないコたちは、マンション暮らしをしていた。

プラスチックの、引き出し型の小さめの衣装ケース。3段×3個。縦にずーっと積み重ねてあって、倒れてこないように家具と家具の間に挟むような形で設置されている。

そのケースが、マンションで、お部屋。

室内（引き出し内）には、新聞紙のちぎったのやら、砂みみたいなものが敷き詰められていて、引き出しの表面部分にはそれぞれ2cm位の穴が開けてある。その、穴の部分には「水飲み」が、なんだかとても器用に取り付けられていた。

1階は、ハム子とハム美。

2階には、ハム吉、ハム男といった具合。

いわゆるネズミであり、私は若干苦手だったのだけれど、まあ白いしちっちゃいし、普通のネズミとは微妙に違うので・・・うーんギリギリ許せるか、といった感じであった。

飼い主さんは、障害者手帳1級の、脳性まひの男性。

脳性まひというのは先天性の運動機能の障害で、程度の差はあるが四肢麻痺、言語障害、筋緊張などが代表的な症状である。知的発達は正常を保たれることが多い。

・・・と、実際に障害のある方と接した経験がないと、これだけではちょっとイメージがわからないと思うので、もう少し分かりやすく説明しよう。

Tさんの場合。

四肢麻痺とは、手や足が思うように動かせないこと。

まず足は、立つことができず、歩行はできない。屋外、室内共に、車いすを利用している。

腕や手も、不自由。

自分では食事は食べられない。スプーンを、自分の口元まで持っていく動作が難しいのである。

ご飯を食べるときには、ヘルパーが全て、口まで入れる介助をする。

但し、腕や手先は全く動かないわけではなく。Tさんは、「電動車いすのハンドルの操作」と、

「ゲームのコントローラーの操作」は自分でできていた。

ゲームは上手であった。

言語障害は、明らか。口の筋肉や発語に際しての機能が、やはりうまく働かないんだろう。

最初は、何を言っているのか2割くらいしか分からなかった。

でも何回か介助に入ると割りとすぐに慣れて、8割くらいは分かるようになる。
言葉は分かりにくいんだけど、知的障害はないので頭はしっかりとしている。なのでヘルパーにあれこれと指示を出して、自分のしたいことを介助してもらうことは可能であった。

つまりTさんは、車いすを自分で動かして、ゲームをすることはできるけれど、その他の日常動作の殆どは、介助が必要な状態ということなのである。

寝返り、起き上がり、ベッドから車いすへの乗り移り。

食事摂取、排泄、入浴、着替え。

掃除、洗濯、買い物、その他もろもろ。

ヘルパーは、Tさんの指示に従い、まさにTさんの手や足、そのものとなって日々働く。

Tさん宅には、24時間、365日ヘルパーが入っていた。

そう、そんなTさんなのであるが・・・、ハムスターを「マンション飼い」していたのである。

Tさん（2）

ハム子やハム男は、全部で20匹以上はいただろうか。

Tさんはそんなわけで、自分の身の回りのことも全面的に介助が必要な状態であったのだから、ハムスターの世話も、当然自分ではできない。

どうしてハムたちを飼うようになったのかの経緯は謎なんだけど、私が縁あってTさん宅に出入りするようになったときには、もうすでに当たり前のように「ハムスターマンション」は存在していた。

Tさんは生まれつきの障害なので、20代の頃まではずっと障害者施設で暮らしていたらしい。口の悪い同僚のヘルパーは「Tさんは親に捨てられたんだ」なんて言っていたけれど、私はそのへんの事情ははっきりとは知らない。

ただ、身よりはないうであった。

障害者の、自立を支援するという考えがあり。

可能であれば、施設を出て、地域で暮らすことは奨励されている。

だからTさんも、ある日施設を出て、一人暮らしをはじめようになったんだろう。

それであのアパートを借りて、最初から多分、ヘルパーが24時間入っていた。

一人暮らしになって、ペットを飼いたいと思ったんだろう。

犬や猫は無理だけど、ハムスターならいいんじゃないかな、と。

それで当時のヘルパーの中の誰かが協力して、ハムの住まいを整えた。

おそらくそんなところだったのだと思う。

ところで「介護保険法」が施行されたのは、2000年4月からであるが。

それ以前にも障害者や高齢者に向けてのヘルパー的な仕事は存在していて、ただ、法がまだしっかりとは確立していなかった。

Tさんが一人暮らしをはじめた頃には介護保険法などというものはなく、まだ「ヘルパーは、ペットの世話はできない」という明確な決まりはなかったのである。

あとから、そういう決まりができた。そうして、障害者の支援においても基本は、介護保険の決まりと同様ですよということが言われるようになったのだ。

だから当時、ヘルパーがTさん宅に入ると、皆ハムたちを見て「ほんとは私たちはペットの世話はできないんだけどな・・・」と、思っていた。

でも現実問題、本人はハムをちょこっと手に乗せたり、じっと見つめるくらいしか出来ないわけだから、ヘルパーの中の誰かが、水をかえたりマンションの掃除をしたりしなければならない。

そういえば自分は、ハム関係の仕事はほとんどしなかったな。

頼まれなかったのだ。

Tさんは「ヘルパー使い」は慣れていて、ちょっと無理そうな仕事なんかは、頼む人と頼まない人をうまく使い分けていた。

私は当時正社員（=会社と近い存在）だったので、うっかりしたことを頼んで会社から苦情がきたりしたら面倒、というような気持ちがあったんだろう。

そういう面ではよそのお宅でも、「正社員のヘルパー」というのはちょっと守られているというか、助かる面も多少はあった。

まあそんなことはおかまいなしに、困った要求をしてくる人もたくさんいるにはいたけれど・・・。

えっと、Tさんのハムである。

私はハム関係の仕事を頼まれることはほぼなかったのだが、それでもどうしても関わってしまったことが何度かあった。

例えば、ハムスターの、ご臨終の場面。

Tさん（3）

ハムスターは、体が弱い。

ミニミニサイズだから、他の動物と比べても免疫力やら抵抗力なんかはだいぶ少ないんだと思う。

特に、暑さや寒さがきめんに駄目なようであった。

よく、ペットのために留守中もずっとエアコンをつけておくという話を聞くけれど、ハムスターもたぶんそのようにしなければいけない部類なんだろう。

Tさんも温度調節には重々気を配っていたけれど、それでも、年間で何匹かはお亡くなりになっていた。

・・・ん？別に温度のせいではなく、あれは寿命だったのかな？？

または病気とか・・・。ちょっと私は、どれが何歳とかまでは全く把握していなかったの（果たしてTさんは、そのへんきちんと把握していたのか。それは謎）、まあとにかく、何が原因かははっきりとは分からないまでも、とにかく結構な頻度でハムスターが亡くなっていたのは事実であった。

そうして息を引き取ると、ハムスターの亡骸が残る。

昔 自分が金魚を飼っていたときには、亡くなると土に埋めていた。

学校の飼育係のときにウサギが亡くなっても、やっぱり校庭の隅のお墓に埋めていたっけな。

（注・いまは衛生上の問題なんかもあって、学校でのウサギの埋葬法は変わっているかもしれない。）

そしてハムスターも、土に埋めるんだけれど。ここで問題が・・・。

Tさんはアパート住まいなので、庭がない。

そのへんの公園なんかに埋めるのも、たぶんいけないんだと思う。まあ1匹くらいならあれかもしれないけど、なにしろ数ヶ月に1回の割合で、亡骸は発生するので毎回公園、というわけにもいかないわけだ。

Tさんは、一人暮らしをはじめてからもう10年くらい経っていて、ハムスターの飼育暦もおそらくその位だったのだろう、亡くなったときの手順も実にスムーズに、きちんと決められていた。

ご臨終のときの処置は、私は何度か頼まれたことがあった。

ここからはちょっとコワイというか、あまり気持ちのいい話ではありませんが・・・。

ハムスターのお墓は、手のひらサイズの、ガラスのコップ。

ふつうに、食器棚にたくさん入っているのをひとつ出してくる。

その中に、あれはなんだろう・・・、園芸用の、土？ 袋に入って売っているような土を、押入

れから出してきて、コップの中にまず半分くらい入れる。

(全てTさんの指示により動いています。)

そうしてハム子を入れる。合掌。

その上から、更に土をかけていく。コップのふち、ぎりぎりまで。

コップ全体が土で満たされたら、最後にコップの表面を、アルミホイルで全て覆う。

お墓、完了。

お墓は、Tさんの枕元近くにある、カラーボックスの一角にそのまま収納をする。

もう一度、合掌。

しばらくTさんと二人で、しみりとする。Tさんが亡くなったハム子の思い出を、ひっそりと語りだすこともある。

・・・と、だいたいこんな流れである。

葬儀ですな。

ところで、枕元のカラーボックスのお墓置き場には、どんどんアルミホイルの巻かれたコップが増えていっていた。

あれ、どうするんだろう・・・。

かなり気になっていたが、私はそれはちょっと聞けなかった。

うっかり話題にして、更にそれらの片付けなんかを頼まれてしまったら非常に困るし。

それはきっと、Tさんのヘルパーの中の「ハム担当」の人が、いずれ何とかするのだろう。たぶん。

Tさん（4）

介護保険のヘルパーだったら、

1. ハムスターの餌やり
2. 水の取替え
3. ハムマンションの部屋の掃除

どれも全て、とんでもない。できない。

4. ハムスターのお墓作りの援助
・・・ありえない（汗）。

しかし障害者支援のヘルパーって、現場では今でもまだそんなような仕事をやっている。Tさん宅に限らず、それはきっとほかのお宅でもあるんだと思う。似たようなことは。障害者というのは特に・・・、なんだろう。「許されている」部分があるんだよなあ。障害者の「権利」とか。そこは、非常に難しい問題。

24時間のヘルパーということにも触れておこう。

1日に何人かのヘルパーが、交代でずっと入っている。

例えば、8時から12時はAヘルパー。12時から16時はBヘルパー。16時から21時はCヘルパーで、21時から翌8時まで泊まりでDヘルパー。

とこんな感じ。

ご臨終の引き継ぎ、という経験もある。

ハム男が、もう虫の息であった。

ストローで水を飲ませたり、あっためたり色々している最中に、ヘルパーの交代の時間がきてしまった。

たまたま次のヘルパーは、気心がしれた同僚だったからまだよかった。

時間になって、同僚が訪問。いきなりTさんと自分が、息も絶え絶えのハム男を囲んで深刻にしている場面だったので、さぞかし驚いたであろう。

ストローを渡して、あとは頼んだと同僚に全てを託す。

まるで、ストローがバトンであった。

臨終リレー。

私はそうして、次のお宅に向かったのだけれど、後ほど同僚からは、あのあと間もなくお亡くな

りになったとの連絡があった。

その日は同僚が、ハム男の葬儀一式を取り仕切ったのである。

Tさんのひととなりをあまり書いてこなかったが、自分と歳がそう離れていなかったこともあって、私はけっこうフレンドリーに、楽しく仕事をさせてもらっていた。

実際の、身体介護のひと通りをTさん宅ではほとんど全てやらせてもらったので、自分にとってもかなり貴重な経験となり、ありがたかった。

自分の身の回りのことにも介助が必要な人が、ペットを飼っているのだろうか、という根本的な問題はあるのだけれど。

Tさんはハムたちを可愛がっており、癒されているような様子であった。

それが、現実。

はっきり駄目という規定もなく、その辺はあいまいにされているというのが現状、というところである。

何でもかんでも法で、いいとか悪いとか全部は決められないということ。病気や障害も、性格も生活のスタイルも、十人十色。枠にはめられない部分があるのは確か・・・。

しかしそんなTさん。その後、ちょっとしたトラブルがあり、自分のヘルパー事業所との契約は終了となってしまったのだ。

それなので自分が介助に入ることはもうなくなってしまったのけれど、きっとまだあのアパートに住んでいて、いまは毎日、違う事業所のヘルパーが入っている。

ご縁があれば、いずれはまた何らかの形で何処かで会えるんじゃないかなと、あの辺りを通るたびになんとなく思っている。

あ、それと。ハムスターはけっこうな頻度で亡くなっていたと書いたが、それと同じくらい、けっこうな頻度で生まれてもいた。

ネズミ産（ネズミ算、か？）という言葉もあるように。

なので今現在も、Tさん宅のヘルパーの仕事には、「ハムスターの世話」というのが存在し続けているはずである。

これは、書こうか書くまいか。

Tさんが契約終了となったのは、実は、「セクハラ疑惑」であった。

新しく入った、ちょっと若くてかわいいヘルパーが、Tさんにセクハラをされたと騒いだのである。

Tさんって、手も足も思うようには動かせないし、発語だっではっきりしない、そういう人なんであるが・・・。

そのヘルパーは、自分からすると、ちょっと頭が悪かった。

確かにTさんにも、まあなにかしら問題はあったのだろうけれど。

障害者の性、についても、自分はいずれはきちんと書いてみたいという気持ちがある。

障害があっても、性欲はあるのである。

ただ、体が動かない。自分で、手足が動かせないのだ。

どうしたものか・・・・・・・・・・。

彼らが恋愛をできればいいが、それは私だって難しいんだから（！）、障害のある身では純粋な恋愛をするというのは、もう奇跡に近いことなんじゃあなかろうか。

特に若い男の障害者は、ハッキリ言って苦悩している。人が大変多いと思う。

食事介助。排泄介助。入浴介助。衣類着脱介助。

しかし性欲介助というのは、ない。

障害者専門の風俗？というのはあるようだけど、メジャーではない。

やっぱり性質上、そのへんは誰も触れられないところなんだろうか・・・。

このことに関しては、また別途、後ほど記してみたいと思う。

Uさん宅では、激しく自己嫌悪（80代・女性）（1）

障害者支援ヘルパーの話が続いたので、次は、介護保険のヘルパーのお話。

介護保険のお仕事は、いいですよ。

決まりがしっかりとしているのでね。

Uさんのお宅は、大好きであった。

今までヘルパーを何件か経験をしたことがある方は分かると思うが、中には自分にとって、「癒し系」のお宅というのが存在するものである。

そのお宅に行くと、自分の方が助かってしまうのだ。心的にね。

よそのお宅であれこれと苦勞をしている分も、ここにくれば帳消し。また、がんばってきますという気持ちになる。

自分にとってUさん宅は、まさにそんな「癒しのおうち」であった。

Uさん宅はまずは外観が、フツウとはちょっと違う。

大豪邸。

いまどきの建物ではないんだけど、昔ながらの、すごく大きな家であった。

大きな門に、日本庭園のような庭。

井戸がまだ残っていて、蔵なんかもあった。

通常の建売住宅なら、ゆうに10個くらいは建てられそうな、広大な敷地。

大地主さんである。

そんな大きな家に、Uさんはたった一人で住んでいた。

15年くらい前にご主人が亡くなってからは、一人でこの家を守ってきたそうだ。

毎日雨戸の開け閉めをして、自分でご飯を作って食べたり。Uさんは日常のことは自立していた。

昨年位までは買い物も自分で行けていたんだけど、徐々に膝関節の変形が進んできて、スーパーまでは歩くのが辛くなってきてしまった。そうして今回、介護申請をして「要支援1」の認定が下りたため、ヘルパーに買い物と、掃除を頼むことになったのである。

ご主人のときにヘルパーの出入りがあったので、Uさんはヘルパーとの関わりには慣れてるようだった。

訪問してまずゴミ出しをしてから、体調はいかがですかと、顔色などをさりげなくチェック。

いつもだいたい、お元気そうだ。

「遠いところを来てもらって。お茶飲んでからやれば」

と、毎回必ず、言ってくれる。

「いえ、お仕事しにきたんで」

と、毎回返す。

お約束のセリフのやりとりであり、私はいつもここでちょっとほっこりしてしまう。

最初は、買い物。

帰ったら、掃除。

一般の人がイメージする「ヘルパーさん」と、とても近い動きだと思う。

ところでヘルパーがする掃除は、「日常の生活している場所」だけに限られている。

Uさん宅のような広いおうちの場合は、家中全部はやらない。

もし、Uさん宅の1階と2階、全てひとりで掃除をするとすると、きっとゆうに3時間はかかってしまうだろう。大掃除になってしまうので、もしヘルパーにそれも頼みたかったら、また別契約でということになる。（介護保険の給付外。1割負担では請け負えない範囲なので、全て実費での契約ということ。）

なので具体的には掃除の場所は、Uさんの行動範囲の、手前の、2室くらいのみである。

でもそれでも広いし、プラス台所と風呂、トイレもあるので掃除はけっこうな重労働だった。

Uさん宅はその先にも、まだずーっといくつも部屋があるようだったけれど、私はその先は見た事はない。

ふだん使用していない部屋は、たまに風通しをしたり、年数回、市内に住む親戚にホコリ払いを頼む程度であったようだ。

まずは、窓を全部開けて、ハタキかけ。

そのあと掃除機。

台所の床の雑巾がけ。

風呂、トイレ。

と、だいたいこんな流れである。

自分が動いている間は、Uさん自身は台所の椅子に腰掛けてお茶碗洗いをしたり、また別室の椅子に腰掛けて、ゆっくりと洗濯物を干したりしていた。

できることはなるべく自分でやってもらい、できない部分はヘルパーが支援する。

「共に行う家事」である。Uさん宅でのお仕事は、そんな理想的な動きであった。

Uさんが、決して無理なことを頼んできたりするような人ではなかったのも、お仕事がやりやすかった要因のひとつである。

Uさんは80代も後半で、膝や腰は痛そうであったけれど、物忘れはなく、まだまだお元気そうであった。

昔の写真を引っ張り出してきて、あれこれお話をしてくれるのもすごく楽しかった。

Uさんがお元気でいるうちは、私はずっとヘルパーに来たいなあ、なんとなく思っていたんだけど。

なかなか思うようにはいかないもので。自分側の原因と、そのときに登録していたヘルパー事業

所の事情が重なって、Uさんとは、2年くらいでお別れをすることになってしまった。

その、自分側の原因というのは、ちょっと悲しい話であり・・・。

Uさん（2）

悲しいというか、情けない話というか。

Uさん宅に入っていた頃は自分はヘルパー暦が5年程になっており、ベテランとまではいかないまでもまあ中堅くらいかな、という自負がなんとなくあった。

経験を重ねて資格もいくつか取れていたのですが、いつの間にか自意識過剰になっていた面もあったのだと思う。

そんなときに、初心者レベルの、ありえないうっかりミスをしてしまったのである。

ヘルパーが掃除を行うときは、掃除用具はその家のものを使用することになっている。

Uさん宅は昔ながらの大豪邸であったのだけれど、それ故に、掃除用具も割りと古風なものが揃っていた。

天井のホコリを払うための専用の、細長いほうきみたいな形の用具なんかもあったな。

ハタキも、昔ながらのもの。

木の棒のさきちょに、布のピラピラが何枚もついているあれである。

棒と布をつなぐ接続部分は、プラスチックの小さなカバーで覆われていたんだけど。

その、プラスチック部分が問題であった。

家具なんかをはたきながら、布のピラピラの部分で、さっとテレビの画面もはたいていた。

つもりだったんだが・・・。

布の部分だけで行っていたつもりが、画面に、プラスチック部分も当たってしまっていたのだ。

しかも自分は、しばらくはそのことに気づいていなかった。

「私は目が悪いから分からないんだけどね、昨日親戚が来たら、テレビにキズがついてるって言われたの。

テレビの画面はハタキじゃなく、布か何かで拭いてね」と、Uさんはやさしく注意して下さった。

ヘルパーが入る時にはテレビはいつも付いていたので分からなかったのだが、テレビを消してみると確かに、画面には、斜めにキズが数本。しっかりと存在している。

自分は、真っ青。

Uさんにはもう、平謝りをするしかなかった。

そうしてとりあえずキズ部分を、布でちょっとこすってみたのだが・・・、

どういうわけか、キズは少し目立たなくなった！

なので慌てて、その後はキズを目立たなくする作業を懸命に試みたのである。

結果的には、テレビが消えている状態でもキズは殆どなくなったように見えるまでに回復をしたんだけど。

こちらの不注意で、液晶画面にキズをつけてしまったのだからこれは大問題なのである。Uさんや、キズを発見した親戚の方がヘルパー事業所に苦情を言い、弁償とか補償の話になっても何らおかしくない状況であった。けれどもUさんは、「どうせ私は見えていないんだからいいのよ」と……。やさしい（泣）。

その後しばらくしても、ヘルパー事業所に苦情の電話が入った様子もなく、確かにUさんは白内障で日頃から見えにくさがあったこともあり、キズの件はもうすっかり忘れてしまったようであった。

そうしてそんなことがあってからも、ヘルパーに来てくれて助かると言って下さり、いつも明るく出迎えてくれたのである。

しかし……。自分の中では、その失敗はけっこう大きな「心の傷」となってしまった。ほんとうに初歩的なミスをしてしまい申し訳ないという気持ちと、自分に対して幻滅、情けないという気持ちがどうにもぬぐいきれなかった。

プラスチックの部分が画面に当たるかもしれない、ということ、どうして予測できなかったんだろう。

一般には昔ながらのハタキというのは徐々に減ってきていて、最近は「ハンディモップ」型が主流になっている。よそのお宅数件では、ハンディモップで家具をはらいつつその流れで画面も一緒にたたいていたので、その感覚でUさん宅でも画面をはたいてしまっていたのが、今回の一番の敗因であった。

日本庭園のような素晴らしい庭には、毎週訪問するたびに次々と色々な花が咲いており、そのたびにいつも花の名前を教えてくださいました。

桜の木も何本もあって、それはそれは見事だった。

義父母と、ご主人の介護をしてきた経験があるのでヘルパーの気持ちは分かるといい、大変でしょうと、ことあるごとにねぎらいの言葉をかけてくれた。

自分が歳を取ったらこういう人になりたいと思えるような、素敵な方であった。

Uさんのお宅の仕事は、Uさんのそんな人柄故に、ヘルパー目線で言うところかなり「いいお仕事」であった。

キズの件はUさんはもう気にしていないようだし、自分の方ももう気にせずに、これからはずっと続けさせてもらってもよかったんだけど。

その後数ヶ月経って、たまたま事業所の事情があったときに、自分はヘルパーを交代することを選んだのである。

小さな失敗だったのだろうか。

気にするほどのことではなかったのか。

苦情を言われなくても、自分から事業所に相談して、改めて謝ったりしたらよかったのか。

Uさん自身は、そんなにオオゴトにするつもりは全くないようであったので、あれはあれで、やはりあのままでよかったのだろうか……。

キズの件がどうにも申し訳なくて、なんてことはひとつも言わずに、ただ、事業所の事情で交代しますとお伝えした。

別れを大変惜しんでくれて、近くに来たらぜひ寄ってねとも言ってくれた。

どこまでもやさしく、いい人であった。

Uさんが、体調を大きく崩されることがなくずっと元気に、あの大きなお宅で暮らし続けていてくれたら何よりだなあと、今はそう思っている。

Kさんの取り扱い方を、誰か教えてほしい（60代・男性）（1）

Kさんのことは、一体どこからどのように書いたらいいのだろうか・・・。

強烈な人であった。

いわゆる、問題児。

自分のヘルパー人生の中でも、そうとうな影響があった人。良くも悪くも。

傲慢でワガママで、自分勝手。病院や、区の福祉課なんかでも有名人であったと思われる。

「ちょっとうるさくて大変な人なんだけど、あなたならきっと大丈夫よ」と。

そう言われて、責任者に、Kさん宅に連れて行かれた。

女好きなんだそうである。そうして、若いコの方がいいと。

当時の私は30代前半。この業界の中でいうと、確かに若い方ではある。

でもまだ自分はヘルパーになりたてで経験はほとんどなく、どう大変でどうしたらいいんだろうとか、何の知恵もなく、全く分からないままにとりあえず毎週通うことになったのであるが。

腎臓機能障害のために10年以上前から、週3回病院に通って透析治療をしている。

そして透析のない月・水・金曜の週3回、家事援助のヘルパーを利用していた。

疾患のために、視力はほぼゼロ。うっすらと見える程度なので、Kさん宅のものは絶対に動かしてはならないという注意はされていた。

（場所が変わってしまうと、見えないからどこに行ったのかが分からなくなり激怒される。）

なので掃除は、細心の注意を払って行う必要があった。

動かしたら、必ず戻す。

まあでもまだそんなのは、たいしたことはなかった。

Kさん宅に慣れるまではあれこれうるさく指示をされて、時には怒られたりもしたけれど。

Kさん自身では掃除やら買い物はできないんだから、やっぱりヘルパーには来てもらってありがたいという気持ちがあったのだろう。何度か通ううちに、怒られることも少なくなっていく。

自分が若いコだったということもあり（！）、Kさん宅には自分は比較的早く慣れていった。

お話し好きな人であり、自分はどっちかという聞き役の方が得意であったので（ヘルパーは相手に合わせて微妙に自分のキャラを変えたりする）、Kさんとの相性自体もまあまあよかったのかもしれない。

そうして数ヶ月経った、ある日のこと。

自分にとっては、ヘルパーとしての初めての困難。大変困ってしまう自体が起こった。

Kさんは、ヘルパーにワイロを出す。

一番最初のときは、どんなきっかけだったか・・・。

買い物から帰った後かなんかに、とにかく持っていけと、突然 5000円札を渡されたのだ。

なんだなんだ？

気分がいいからとか、なんかそんな理由だったかな。

今思えばあれは、いつもありがとうとか、これからも来てほしいとか、そういうことだったんだろうと思う。

でもヘルパーは現金は勿論、お菓子やお茶なんかも基本は何も貰ってはいけないのだ。

そういうのは貰えないですよとか、仕事で来ていてお給料で貰っているのだから気にしないでとか、とにかく受け取れないと自分は一生懸命、汗だくで説明をした。

しかしKさんは、今回の件に限らず日頃から、自分の意見・主張などは絶対に曲げない人であった。

俺が持っていけと言うんだから、いいからとにかく持っていけ。うるさく口答えすんな。

福祉課の職員さんや、看護師さん、医師に対してさえもそういう面があったため、その後もKさんは様々な事件を起こしていくのだけれど。

常識的に考えておかしいようなことも、誰の助言も受け入れない。自分でこうと思ったら貫き通す面があった。

そして、従わないと、しまいには怒るんであるが。

その、怒り方が、フツウの人とは全然違うんである。

Kさん自身はカタギであるけれど、Kさんの父上がヤクザ屋さんだったとか。

だからというか、けっこう本気で怒られてしまうと・・・心底、コワイ。

後にも詳しく述べたいと思うが、手を上げたり、凶器までも隠し持っておられ・・・。

そんなわけで、ヘルパーごときはKさんには到底逆らえないのである。

5000円の受け取りを粘り強く拒否していたのだが・・・、Kさんが“マジ怒”の一步手前になってしまった。

これはだめだ。

私はその日は、もう半泣きになりながら 「じゃ、責任者に相談しますから」とつぶやきながら殆ど逃げるようにKさん宅を辞したのである。

右手に、5000円札を握ったまま。

Kさん（2）

施設や病院で働くヘルパーさんと、在宅のヘルパーさんとの大きな違いのひとつは、その「職場環境」だろう。

施設では常に他者の目があるのに対し、私たち在宅のヘルパーは、利用者さん宅では完全な「1対1」となる。

（家族と同居の場合でも、まあ似たようなもの。）

ワイロのあれこれが発生するのも、その密室状態、職場環境の事情ゆえであろう。

言わなきゃ分からないんだし。

ここだけの話だから。

ワイロの受け取りを拒否すると、だいたい言われる言葉。

そうして、ちょっとしたものであったら、最終的にはもらってしまう場合もある。

じゃあ今回だけにしてくださいね、これで最後とか何とか言って。

受け取ってもらえると、利用者さんはとっても嬉しそう。満足げである。

それで次週にまたそのお宅を訪問した際に、今度はヘルパー側がお返しに、ちょっとしたものを持っていったりするようなこともあるのだ。

全く何のやり取りもしないのは理想であり、そういうやり取りはハッキリ言って、こちら側からすると面倒以外の何ものでもなただけれど。

どうしてものお宅では、そんなふうにすることもある。

そうしてそんな、ちょっとしたヒミツの共有をすることで利用者さんとの距離が縮まったり、信頼度がアップしたりすることも少なからずあるのである。

・・・そう、Kさん宅でが初めてであったけれど実は私のワイロ経験は、Kさん宅だけにとどまらないのだ。

その後よそのお宅でも、数件あった。

相手は、あくまでも好意なんでしょうけどね。

こんなにやってもらって申し訳ない。これ気持ちだから。

受け取ってもらわないと私の気が収まらないのよ。

皆さんだいたい、そんな風におっしゃる。

“ワイロの苦悩”は、在宅のヘルパーさんだったら経験のある方は多いでしょう。

自分はもう、おまんじゅうとかせんべい1枚とかは、あまり気にせずに頂くようになっている。

お茶1杯もしかり。

全く手をつけられないと、出した方の本人はどうにも気持ちが悪くてしょうがないんですって。

それならばしょうがないかなと。

しかし事業所によっては 厳密に「ダメ！」とやっているところもあるようで、相手がお茶を入れようとしたらすかさず、ヘルパーは自分の水筒なりペットボトルを どーんと出す。そして「自分はこれがありますから」と言い、お茶の1杯も断るようと指導をしているところもあるらしい。

でもいっそのこと、事業者でそこまで徹底してやってもらったほうが、もしかしたら現場で働くヘルパーはやりやすいのかもしれないな。

事業所は大変だろうけど。よっぽどしっかり管理のできる会社じゃなくちゃ難しいだろう。お茶の1杯くらいは、個々のヘルパーの判断に任せるとしている事業所の方が多いように思う。

そうしておまんじゅうなんかじゃなく。

現金を渡したがる人に対しては、現役ヘルパーの皆さん方は 一体どうやって“かわして”いるのか、こちらが聞いてまわりたいくらいなのだが・・・。

おっと先に、Kさんの話に戻る前に これは書いておこう。

お菓子などをくれる利用者の皆さんへ。

好意でやって頂いているのは重々承知ですが、私たちヘルパーは、それらをもらっても、はっきり言って全く嬉しくありません。迷惑です。ぜひやめて下さい。

・・・と、本人の前でもハッキリと言えたらいいのだけどね。

好意であるがゆえに、難しいです。現実には (T_T)。

さてでは、5000円札を握ったままKさん宅を出てきてしまった、新米ヘルパー「私」の、その後。

続きに戻りましょう。

Kさん（3）

わ～どうしよう、現金はほんとうに困るなぁと思いながら、私はすぐに事務所に電話をして、この顛末を全て責任者に話して指示を仰いだ。

どうしても断れなくて、これどうしたらいいでしょう、と・・・。

事務所に相談、という自分の行動は、良かったと思う。

そうしてそれを聞いて、責任者はどう答えたかというと。

「そうか。いただきだね」

・・・まあ～～。

・・・いただき、なの？

あ、そうなの??

・・・頭がぼんやりとしてしまって、その後どうやってその電話を切ったのかはよく覚えていないのだが。

でも、そうか。

ああ、徐々に分かってきた。

私が入る前にはKさん宅には、その責任者、当人が入っていたのだ。

責任者が忙しくなったので、交代要員で自分が入るようになったのである。

だからたぶん、責任者自身もKさん宅で、以前全く同じような経験をしていたのだ。

断っても断りきれず、しまいには怒られて、その責任者も同じように現金を受け取ってKさん宅を辞してきたことがあったのだ。

だからもう、対応としては「いただき」しかないのだと・・・。

そういうことのようにであった。

でもね、ワイ口ははっきり言って、嬉しくないしずっとモヤモヤ感があるのである。

借りがあるみたいで大変イヤだし。

ちなみに、責任者の上の存在の管理者というのも、同じような感じであった。

いちいち細かいことまでは相談してほしくない、現場の力量で勝手にやってくれと、管理者はそういうスタンスであった。

うまくやってくれれば、詳しい報告はいいから。

聞きたくないと。そういうことのようにであった。

でもそれって、もし何かのトラブルが発生したら、事業所としては知らぬ存ぜぬ、全面的に自分

が悪者にされてしまうということだよなあ。

事業所や責任者は守ってくれないということが分かり・・・。

自分なりに、本で調べてみたりもした。

ものを上げたがる利用者さんに対しての接し方。

おまんじゅう1個くれると言う人には⇒「ではこれ、事務所の皆で分けて頂くことになります」と言うと、一人あたりはずいぶんちっちゃんなるわねと言い、笑って諦めてくれた利用者さんとか、

現金をくれると言う人には⇒「これを受け取ったら、私は事業所をクビになる。もう来られなくなりますか」と言うと、それは困ると言い諦めてくれた利用者さんとか。

・・・あ———きれいごと！

でも、当時は分からなかったんだけど。

どうしても現金を渡すというのなら、次回から私はもう来れませんかと言って、そのままKさんのお宅は自分で断ってしまっても良かったのだ。

その頃は、自分はまだ会社に入ったばかりであり、どうしてものお宅はこちらから断ってもいいなんていう発想は全く持ち合わせていなかった。

あちらからお断りされない限りは、ずっと通い続けるもんだと思っていた。

通い始めたばかりなのに、もう行きたくないなどと言って自分の信用が落ちるのも困るという気持ちも多少はあったかな。

それに、私たちヘルパーはどうしても、実際に利用者さんと日々接していると「相手とうまくやらなきゃ」とか、できるだけなんとか頑張らねばと思ってしまうものである。

どんなに相手が困った人であっても、この人はヘルパーの介助がないと生活ができないんだよなあとか。

もし私が断ってもまた別のヘルパーが入って、その人はまた同じように苦勞をするのは目に見える。

だったらどこかで誰かがうまくやらなきゃならないんだよなとか。

いろんなことを考える。

登録ヘルパーさん（パートさんみたいなもの）は時給で働いているので、頂いたお仕事は簡単には断れないという事情もある（断れば即、給料減につながってしまうし、一度そういうことがあると次のお仕事を紹介してくれないんじゃないかという懸念もあるようだ）。

私は当時は正社員（月給制）だったので、Kさん宅は辞めて別のお宅に変えて欲しいと言ってもお給料が変わるということにはなかったのだけれど。

正社員なのに、この位のことも何とかできないの？こらえ性がないわね、なんて上の人に思われるのは悔しいという気持ちも確かにあった。

守ってはくれないのに、仕事が減ることにに対してはいいカオをしない会社であったので（儲け

主義?)、なんとか頑張ってKさん宅は続けなくてはならないのだという風に思い込んでしまってもいた。

そういうわけで、過去にKさん宅に入っていた責任者は、「いただき」ということだった。それでKさんの機嫌も良くて、Kさんに気に入られて丸く収まってヘルパーの仕事が続けられるのならばいいじゃないかと。

ところでKさん宅、週3回のうちの1回、水曜日には自分が入っていたのだけれど、後の2回、月曜と金曜には 以前から別の登録ヘルパーさんが入っていた。私と同年代の若めヘルパーさんで、Kさんには気に入られており、ずっとうまくやられていた。なので、わざわざお互いに確認もしなかったけれど、その登録さんもまあ「いただき」ということだったんだろう。

それで、自分は・・・、
その5000円。どうにも居心地が悪くって、返せないし、かといって割り切って「いただき」もできないまま、ヘルパー関連の書類の入ったファイルの中に、その後も長いこと、そのままずっと入りっぱなしになっていたのである。

Kさん（4）

1年、2年とKさん宅に通い続けるうちに、書類ファイルの中に入れっぱなしの5000円の枚数は次第にじわじわと増えていった。

ところでKさんは、人間的にどうよ！って部分が多々あったのだけれど。

ワイロってのは、当人同士のヒミツというのは大前提でしょう。

自分が好んでやっていることなんだし、あげた後にはもう、それについてはあれこれ言わないのがフツウだと思うのだが。

それなのに・・・。

あるとき、もうひとりの登録ヘルパーさんとKさんの関係がなんだかこじれてきてしまっているようであった。

（ろくに掃除もしないですぐに座り込んで喋ってばかり、とかなんだかそんな理由であった。）

そんなわけでその登録さんは、ある日Kさん宅を辞めることになったんだけども。

そうすると、Kさん・・・、

「〇〇さん（その登録さん）には、かれこれ50万以上やった」とか（しかも金額大きく言う）

、

「上寿司とかメロンとか、かなりくれてやった」とか（貢ぎ物も大きく言う）、おっしゃるんである。

うまくいっている時にはいいのかもしれないが、ひとたびこじれると、Kさんは他者にそんなことを平気で言う人であったのだ。

だめだねえKさん・・・。

そして、やっぱりワイロはもらっちゃダメだと、自分は決意を新たにしたわけである。

（ファイルに5000円札が数枚入っている時点で、もう貰っていることになるといえばそうなのかもしれないが・・・。）

そうしてそのうちに、自分は自分なりの、独自の対策をみ出した。

よそのお宅では、何かもらったら同じくらいの金額のものを翌週にお返しで持って行くなんていうことをしたこともあったけれど。Kさんは疾患のために食事や水分の制限をしていたので食べ物などでお返しをするということはできなかった。

ものも、何もいらぬようであった。

それでどうしたかという、ほんとうに、苦肉の策。

お買い物の仕事の時に預かる、財布である。

Kさんは、目が悪い。

日頃は金銭管理は自分できちんとやっておられたが、私はきっちり把握していても、小銭までは目で見ても判別ができないためざっくりの把握になっているということが次第に分かってきていた。

毎回、買い物のメモと一緒に財布を渡される。

そうして帰宅すると、レシートとおつりを目の前に出してヘルパーが読み上げ、それでおつりは財布に戻すという、そういう流れであった。

レシートはすぐに捨ててしまうという習慣も利用して・・・、

おつりの小銭とまじえて、ワイロを少しずつ返却していったのだ。

「はい、2145円おつりです」と言って、2000円と、あとは実際は100円玉とか500円玉がちょっと多めに混じっていたりと、そんな具合。

そして小銭はじゃらじゃらと、さっさと財布に戻してしまうのだ。

Kさんは小銭まではきちんと確認しないことを利用した、たくみな戦略である。

これは我ながら素晴らしいやり方だと当時の自分は思っていたのだが。今考えるとだいぶ苦しまぎれである。

しかしそうして、Kさんの前ではワイロをもらっている風を装って、実際には少しずつ返していった。

登録さんに50万やったとか言いふらしていた経緯があったので、こうしておけば、もしいざという時というか今後何かあった時には、自分は堂々と言い訳ができると思ったのであるが。

地道にちょちょこと、着々と。

本人には気づかれずに機嫌を損ねることもなく、とにかく自分は少しずつワイロの返却に成功をしていったというわけである。

Kさん（5）

「実は〇〇さん宅で、どうしても断れずに現金を貰ってしまった。どうしたらいいでしょう」もし登録ヘルパーさんからこんなような電話が来たら、他の事業所の責任者の方々というのは一体どのような対応をしているのだろう。

相手の性格などによっても色々なんだろうけれど・・・。

相手が、Kさんみたいな人だったとしたら どうだろう。

責任者がKさん宅に行って、そういうのは絶対にやめてくれとか説得をしても無駄な相手ですよ。

自分が当時働いていた事業所では、そんな現金関係のトラブルでさえも・・・、どうも、「ヘルパーさんの個々の力量で」ということであるようだった。

なので自分は、前述のような苦しまぎれの対策をとったんだけど。

でも。

「おまんじゅう頂いちゃった」と、「現金頂いちゃった」は、違うのである。

現金は、重い。

私は現役で現場をやっていたときには他の事業所のことなどは全く分からなかったんだけど、その後徐々に、他の事業所の責任者さんと面識ができたり、区の福祉課職員さんなんかとも多少お話をする機会などがあり、次第に分かってきたことがあった。

もし、そんなような現金がらみの相談が現場からあったとしたら、やはり一般的には、事業所としても何かしらの対応をしてくれるものである。

気難しいKさんのようなお宅での、非常に困った事態があったと現場のヘルパーさんからSOSがあったら、それも全部あなたの責任でがんばってなんていう姿勢はやっぱり酷だ。

「チームケア」なのである。何か難しい自体が生じたら、皆で話し合い、知恵を出し合ってなんとか解決をしましょうという風にやるのが、よその事業所の通常のやり方であったのだ。

私は常勤ヘルパーをやっていた5年間は、もうガッツリとKさん宅には通っており、事業所の応援もなくとにかくうまくやってくれと言われるのみで、全面的に自分の機転に任せられており今思えば苦しい日々であったのだが。

私がKさん宅を引退してからは、だんだんとよその事業所さんの入る日が多くなり、やがて完全に事業所交代となっていた。

そうしてその、新しく関わるようになった事業所さんの対応を、後ほど自分は偶然に知ることができたのである。

その、次の事業所の責任者さんは、Kさん宅での苦労の一部始終を余すところなく全て区の福祉課に報告をしていたのだ。

Kさんはこんなにワガママで自分勝手に、現場ではほんとうに困っている。もし断ったりKさんに逆らおうものなら、ものすごい勢いで怒られて怖いし、はっきり言ってお話にならない。なのでもう私たちは、ヘルパーで入るのならKさんの言いなりになるしか方法はないのだが、それでもいいですか、と。

現金とか貢ぎ物も、断れば逆ギレされるので現場のヘルパーは、もうそのままらうという姿勢を取っていますよ、と。

そういうことを全部、障害者支援のヘルパー費用を給付している（お金を出してる）おおもとの「区」に報告をしていたのだ。

そうなのである。

Kさんとうまくやる、ずっと援助に入り続けるには、Kさんの言いなりになるしか方法はなかった。

そして、あとあと事業所としても後ろめたいことのないように、先回りをしてワイロの件なども福祉課に全て報告し、前もって「暗黙の了解」みたいな形を作っていたのである。

そうして報告を受けた区の福祉課も、内情を把握はしていても 特別にそれについての対応をするということにはなかったようだ。

Kさんがお話にならない人であることは分かっていたので、報告をされてもどうしようもなかった、というのが実際のところかな。

区の福祉課職員さんも、苦労をされていた。

当時は障害者の自立支援と介護保険の決まりの統合が進められており、障害者の方のヘルパーの時間などが徐々に短縮されていた頃だったのであるが。

よそのお宅が、今まで3時間ヘルパーが入っていたのが2時間になったりしていた頃に、Kさんは時間短縮を猛烈に拒否。福祉課の偉い人などが何度も説得に来ても応じずに、最後まで「家事援助3時間」は貫き通していた。

でも、正直言って家事の3時間というのは相当長いし、実際に、まあ必要がないと言われればしょうがないかな、というところであった。

半分は、お話相手の時間なのだ。

Kさんはお話好きなんだけれど独居で寂しいので、ヘルパーが来たときにはテレビを見ながらワイワイお話をするというのを楽しみにしていたのである。

もちろん表向きは、うちは掃除がこんなに大変だから3時間は絶対に必要、という理由で押し通しているのだが。

ヘルパーの時間を減らすのは弱いものいじめだと被害的になってみたり、区の職員さんに対してもかっとなって、手を上げそうになったとかならなかったとか。

半分はお話相手の時間になっているという現状は、区の福祉課でも重々承知していた。それだけのために、余分にヘルパーを入れることはもうできないご時勢になっていたのだが（予算不足だと思う）。

でも区では結局は、Kさんのお宅では時間短縮は最後まで実行できずじまいであった。
説得や口論が繰り返されながら、Kさん宅の「家事援助3時間」の時間数は確保され続けていた。
Kさん見事に、ワガママを通したというわけだ。

障害福祉課が担当の間は、まあそんなような風であった。

障害者の支援というのは、臨機応変、まあまあまあという部分が多いのですよということを前述したことがあるが。

Kさん宅での支援も、そういう面が多々あった。

そういう問題児であったので、Kさんの機嫌を損ねて暴れられたり世間に迷惑を掛けられるよりも、ヘルパーさんと機嫌よく仲良くやっていてくれるのであれば、その方が得策との判断だったようにも思われる。

Kさんが、障害者の自立支援ヘルパーを利用している間は、とにかくそんな風に現場ではなんとか折り合いをつけていた。

しかし。

障害者も、いずれ65歳になると、今後は介護保険のサービスを利用する、という形に移行をする。

介護保険の方が、優先なのだ。

そうすると今度は、メインの担当は障害福祉課から介護保険課に移るんであるが。

介護保険では、ヘルパーさんがやっていいこととダメなことがはっきりと決められている、ということは別の人のお話の中ですでに書いた。

Kさん、このまま行けばいずれは介護保険の決まりの中で、ヘルパーなどのサービスを利用することになるのだけれど。

介護保険になっても、果たしてKさんは今まで通りのワガママ放題でいられたんだろうか……。

やや余談になるが、介護保険の現場の方が、障害者支援の現場よりももう有無を言わずといった感じで、家事援助などの時間が年々、どんどん短縮されている。

例えば掃除が終わって残りの10分、書類を書きながら利用者さんとちょっと世間話をしたりお茶を飲んだりする時間が以前は多少はあったのだが。

もう、洗濯干しと掃除だけで時間が精一杯、余計な話をする暇はなく、ヘルパーさんはハンコだけ急いで押してさっさと帰らざるを得ないということになっているお宅が多いようだ。

それはちょっと寂しいというか、残念であるという声を聞くことがある。

利用者さん当人もそうであるし、やや遠方に住む家族なんかも同意見であるようだ。

なにげない会話の中から、利用者さんの体調の変化に気づいたり、困っていることなどを新たに発見したりすることもあるのである。そのちょっとした時間は、掃除をする時間と同様の価値があったのではないだろうか。

ヘルパーさんがそうやって定期的にさりげなく利用者さんの様子を観察してくれていることで、

なかなか訪問ができない家族は安心できていたりもする。

あんまり予算に縛られて、最低限の仕事だけやっていればいい、というようにならないといけないなあと思う。

掃除の時間以外の、ちょっとした余分な時間の中の方にむしろ意味があるというか、大事なことが隠されていたりすることが多いのを知ってもらえるといいのだが・・・。

Kさん（6）

ところでKさんは、一体どうしてあんな風にお話にならない、病院や福祉課でも有名な「問題児」であったのだろうか。

もともと、ちょっと変わった人のようであった。

いや、変わっていると言うよりは・・・、「とびぬけていた」人であったようだ。

幼い頃から勉強もスポーツもできて、体格も立派。やさしくて人気者。弱い子をかばう面などもあり。

エースで4番。野球ではいくつもの賞をもらっているような、この辺ではかなりの有名人であった。

（昔の写真を見せてもらうと、小学生の集合写真の中でアタマひとつ出ている。顔立ちも端正であり、目立つ存在であったというのはいなはずけた。）

そうして父上はヤクザ屋さんだったのだから、こわいものなしであったのだろう。

周りの子たちはKさんを尊敬していたかもしれないし、Kさんには誰も逆らえないような面はもうすでにこの頃からあったのだと思われる。

人の意見を聞かなかったり、自分が全て正しい、とかそういう風になっていくのもちょっと分かる気がする。

高校を卒業するときにはプロ野球の球団からもお声がかかっていたのだが、あいにくの肩の故障。

野球の道はあっさりと諦めて、そこからは事業にまい進していったそうだ。

なんだかものすごい大金をうごかして、大儲けをして、豪邸や別荘もあったとのこと。

きれいな妻と、可愛い息子と娘。

幸せな暮らしをしていた。

しかしそんな暮らしは、長くは続かなかった。

事業に失敗をしたのか、脱税だったかな（成功していた頃の話と違い、そのへんのことはKさんははっきりとはお話したがらないんだけど）。

人生が、急落。

お金が無くなる前に、渡すものを渡して妻とは半ば強引に離婚。息子や娘ともお別れ。

それからは、借金までにはならなかったようだが、昔のような派手な暮らしではなく、ひとりでトラックの運ちゃんか何かをしながらずっと暮らしていたようだ。

Kさんは見かけによらず、お酒は全く飲めない人であったのだが。

その頃、某炭酸飲料にハマリ、仕事をしながら毎日5リットルくらい飲んでいてさうだ。

そのほかにも、食事に気を使うこともなく肉などおいしいものを、好きなだけ食べていた。

そして、体を壊す。腎臓機能障害で透析治療が必須という体になったのである。

仕事ができなくなってからは、週3回の透析治療に通うのがKさんの仕事となった。

そしてやがて、生活保護となる。（障害の人は生活保護多い。）

きらびやかな生活をしていた頃の昔話はとても面白かったのであるが、

（いまはアパートで、こんな暮らしだなあ・・・）とは、ヘルパーは勿論口には出せない。

Kさんには、逆らえない。言いなりになるしか対応としてはないんだなということは早い段階で分かったので、それからは私はKさんの機嫌を損ねないよう、顔色を伺いながら、とにかくKさんの気に入るような動きをすることに徹した。

自分はもともと、反対意見を言ったり断ったりということは苦手であり、相手に合わせた動きや受け答えが得意なタイプなので、割りとKさんにもすぐに気に入られていった。

それにKさんは、頭も良く、すごい人だったんだなあという片鱗も垣間見え、機嫌を取るまでもなく純粋にKさんとのトークを楽しんでいる場面も数多くあった。

身に覚えのない事柄で怒られたときにも、もうすぐさま謝った。

そんなつもりはなかったのだけれど（身に覚えもないけれど）、Kさんに不自由をかけてしまったのならほんとうに申し訳なかった、と。

スゲー怒ってても、とにかく謝ればいいんだなということは、もうテクニックのひとつとして身につけていた。

気に入られると、そのお宅での仕事がやりやすくなるというのはあるんだけれど、逆に、「代わりがない」というプレッシャーも出てくる。

他の人は面倒だから、もうずっと自分に来てほしい、というような雰囲気は日々、暗に醸し出されていく。

そして自分も、Kさん宅はほとんど休むことなくせっせと通い続けていったのであるが。

あんまり依存されたり、ひとりの人にガッツリと関わりすぎると やっぱり疲れてくるものだ。自分はがんばりすぎて、じわじわと自分の首を自ら絞めていっていたのかなあなんて、今では思っている。

ある日、どうしても休まなければならない日があった。

同僚に、臨時で自分の代わりにKさんのお宅を頼んだのだが。

その同僚も、私と同じようにけっこう面倒なお宅にいくつも行ってたし、Kさん宅の臨時訪問も今回が初めてではなかったので、まあ無難にこなしてくれると思ってお願いをしていた。

その同僚は仕事はとてもでき、あちこちのお宅で信頼もされていた。

けど、自分とはちょっとタイプが違い、例えば自分に身に覚えのないような事柄であったら、絶対に謝ったりはしない人であった。

そうして毎週毎週 カオをあわせるというわけではない、臨時のお仕事という気安さもあったのかもしれない。

同僚は、Kさん宅で洗濯物を干しながら、Kさんにうっかりしたことを言ってしまったのだ。

「Kさんは生活保護で皆の税金で暮らしているんだから、そんなにワガママばかり言える立場じゃないでしょう」

と・・・。

これは、地雷であった。

Kさんは、顔色が変わった。

そうしてだまって、押入れからゴソゴソと、なにやら取り出してきたのだ。

パール、というの？

凶器である。

あんなのでアタマを殴られでもしたら、間違いなくアタマはぱっくりいってしまう。

そんなものを右手に持ち、Kさんは、同僚に向かって右手を振り上げたのだ。

そして、帰れ、とひとこと。

さすがの同僚もこれには顔が青くなり、洗濯物も途中で即、逃げるようにKさん宅をあとにしたのである。

怪我などがなくて、ほんとうによかった。

もしあのときに何かあったら、代わりに頼んだ私はどうにも申し訳がたなかった。

そんな目にあわせてしまった時点で もうダメだと言ったらそうだけど・・・。

その後分かったのであるが、Kさん宅の押入れには、パールだけでなく小刀？日本刀？のようなものなどもいくつか入っていた。

そうしてKさん、自分は、キレると何をするか分からないからと、台所の包丁の切っ先の方は全て折られていたのである。

先っぽが尖っていると、うっかり人を刺しかねないからと。

そういう人であった。

そしてもう その同僚にはKさん宅は頼めなくなってしまい、ますます自分の「Kさん宅担当度」は上昇していったのである。

Kさん（7）

そんなKさんであったが。

やはり、疾患のためにだんだんと、年々体が弱っていくような様子が見られた。

昔はイケメンでモテモテの風貌であったのに、すっかり痩せ細り、眼球の黒目部分は真っ白であった。

家の中では、立ち上がるのが大変となり這っての移動が多くなっていった。

失禁も増え、家中に新聞紙がしきつめられたりもしていた。

ヘルパーの掃除もなかなか大変になり。

週3回の透析の通院も、独力では辛くなってきたようだ。

長いこと通っていたクリニックとトラブルを起こしたこともきっかけとなり（ゆるせない看護師がいて、こっそり凶器を持って出掛けていたら見つかったとか何とか）、そんなわけで今度、病院を替わることになった。

それで、通院先が変わるのに合わせて、透析の通院介助の仕事（ヘルパーが通院に同行して、病院内で車椅子を押したりする仕事）も新たに増えることになったのであるが。

そのときの、Kさんの言い分はちょっと印象的である。

不景気だしお宅の事業所も苦しいだろうから、自分が仕事を増やしてやるよ。よかっただろう。

ありがたく思え。みたいな事を言っていたのだ。

まあ～。

私たちのために、仕事を増やしてやったんだと、そういうスタンスできたもんだ。

自分の体が大変になったからなのに・・・。

でも、Kさん。ちょっと屈折してるんだけど、私たちのために思ってやってくれているという面も確かにあった。

ワイロも、そう。

ヘルパーなんて安月給で、割りに合わないだろう。だからこれ持っていけと。

Kさんがいろいろくれるのには、そういう意味も含まれていたのだ。

そうして「家事援助3時間」に固執してしたのも、どうやら私たちヘルパーのために思っての部分もあったようだ。

せっかく来ても時間が短かったら、給料はいくらにもならないだろう。うちではせめて、3時間分の給料はずっと貰えるようにしてやるからな。

そんな風にもおっしゃっていた。

Kさんなりに、気をつけてくれていたということなのであるが。

そんな無理とかワガママを通して、何とかそれに合わせて仕事をしなきゃならない状況の方が

かえって迷惑になっているということに、Kさんは気づかない。

いえいえ私たちのことなんか気にせずに。私たちは決まり通りにやらせてもらうのが一番ありがたいんですよ。

とは、Kさんにはやはり言えない。

まあそんなに気を使ってくれていたのね、Kさん。なんておやさしい。

実際には、そんな風にしか言えないのである。現場の人は。

現場は、大変ですな。

今思えば、割に合わないだろうって言っていたKさんの言葉も、あながち間違っただけではなかったのかな。

そうしてKさんも、悪気ではなかったようなのだ。困らせるつもりなどでも。

Kさんがワガママを言うのには、「障害者や生活保護の人がハッキリとは言えないことを、自分が代表して言ってやっているんだ」という気持ちもあったようなのである。

やり方とか、言い方なんかは大いに改善すべき余地があるのだが……。

それに、それならいっそのこと厚労省に直接文句を言ってくれよ、なんてこっそり思ったりもしていたのだが……。

しかし現実問題、Kさん宅の仕事が増えるのは、事業所にとっては悲鳴であった。

家事援助3日、プラス、透析の通院介助3日（送迎なので、行きと帰りで1日2回入らなければならない）って、そんなに人員がないのである。

誰でもいいというお宅ではないし、自分も、他の家もあるし入れる日は限られている。

それなのでこの辺りから、よその事業所さんも少しずつ、Kさん宅に参入をするようになっていったのだけだ。

それでも自分は、週4回くらいは、何かとKさん宅には出入りを続けていた。

もうこうなったら、自分はKさんの最期のときまで見届けますよと、そんなつもりで関わっていたのだが。

自分がヘルパーの仕事始めて5年。Kさん宅での仕事も5年。

思えば自分が常勤でやっている間は最初から最後まで、Kさんのお宅にはずっと入っていた。

ところで、Kさんは特別にひどかったが。

実は、サービス利用をしている障害者や高齢者の方々の中には、「お話にならない人」というのはけっこうな数で存在しているように思う。（認知症などで会話にならない、という意味ではなく。）

感覚的な話であり、全ての人が必ずそうということでは勿論ないのであるが……、

介護サービス利用をしていない（ちょっとの不調はあっても、まあまあ元気で暮らせている）方々よりも、サービスを利用している（何らかの障害や病気がある）方々の方が、頑固だったり、

自分の考えを絶対に曲げない、思い込みの激しいような人が多いんじゃないかという気がしている。

心の柔軟性が足りないと、身体面にも不調が出てきやすかったりすることなのかしら・・・。

自分とは反対の意見の人の話も「なるほど」と思って耳を傾けることができたり、同じものばかり、好きなものばかり食べない。、執着しすぎない、何でもほどほど、まあこんなもんかというような、いい意味でのいい加減さ。楽観的。くよくよしない。

そういうバランスを取れている人の方が、大病などにはなりにくいんじゃないだろうかと、今は自分は何となく感じているのだ。

心の持ちようとか、生きていく上での姿勢などが、病気を作り出すこともあるのか。

う～ん、全く深いよなあ、人間。

前に通っていたクリニックでトラブルを起こして新しい病院に変わってからも、Kさんは絶好調にワガママであった。

気に入らないことがあると、病院内でもかまわず大声で怒鳴る。看護師をグーで殴る（うっかり当たってしまったと、本人は後で言っていたが）。

そんなことで、その病院からも出て行ってくれと言われたり、医師ともケンカになったり・・・。

しかし、また次の病院を探すのも大変であるし（どこに行ってもまた問題を起こすのは目に見えてる）、急ぎよ、福祉課の担当職員が病院を訪問して、通院を続けさせてもらえるように頼んだりもしていた。

しかしKさんはどうしてそんなに、病院でもワガママ放題、好き勝手にできたのだろう。

普通の人だったら、出て行ってくれなんて言われたら困るし、問題を起こさないように、多少の不満はあってもじっと我慢したり折り合いをつけていくもんなのであるが。

Kさんは、ある意味頭のいい人であった。

行政が、自分を見捨てることはできないということを重々分かっていたのである。

そんなに自分勝手なことをするのなら、Kさん宅のサービスはもう全て打ち切ります。勝手にやって下さい。

とは、行政は、基本的には言えないのだ。

どんなに問題のある人でも、その存在を行政が認識している以上は、全くの見殺しにはできないということなのである。

福祉サービスや医療、生活保護が打ち切られるということはないのを知っていたので、Kさんはどこまでも強気な態度であった。

お世話になっていて申し訳ないとか、せめてつつましくやろうとか、普通の感覚であればそんなような気持ちにもなるんだろうけど・・・。

普通の感覚とは、かけ離れた人であった。

そんな風にドタバタしながらも、病院を移ってから2年位経ったころ。

自分は、ヘルパー歴が5年になり、介護の資格が取れたこともあって常勤のヘルパーを辞めることにした。

Kさんの最期まで見届けるつもりであったが、Kさんの心臓の方が、強かった。

自分の方が先に、息切れをしてしまったのである。

長い間大変お世話になりました。Kさん宅では、楽しく仕事をさせていただきました。

新しい職場の方が条件が良かったので、Kさんも、そっちの方がいい、よかったなという感じで自分とお別れはこじれることなくスムーズに行くことができた。

(ワイロの件を、大げさに言われたりすることもなかった！)

そうしてじきに、完全によその事業所に移り 数年。

私は別の場所で働きながら、Kさんのあいかわらずの奔放ぶりを時々風のウワサで耳にしたりもしていたのだが。

Kさんが亡くなったときのエピソードは、ちょっと印象的である。

最期までKさんらしかったのだなという話が、自分の耳に入ってきた。

64歳の、あと数ヶ月で65歳になるという、一般には障害の自立支援サービスから、ちょうど介護保険のサービスに移行しなければならないという時期であった。

障害者支援というのはまあまあまあという部分が多々あり、大目に見られていたり優遇されていたり、ヘルパーの入る時間も介護保険よりは長い時間のケアが認められていたりということは以前にも書いたのだが。

65歳になると、今まで障害者サービスを受けていた人も、まずは介護保険法の決まりにのっとってサービスを利用することになる。

ちょっと話がそれてしまうが、ここで、障害者の人が65歳になるとどういことが起こるのかについて、簡単に触れておこうと思う。

すごく分かりやすく言うと、

障害者は、介護保険に移行する歳になると「65歳になるので、来月からはヘルパーの時間が半分に減りますよ」と、突然、宣告されるということがあるのだ。

それはどうしてかと言うと、まずは、障害者サービスと、介護保険のサービスでは予算の出どころが違うためというのがひとつ。予算の都合で、65歳以上になったら、1割負担では今まで通りのサービス量の支給はできないんですよ、ということがあるのだ。

障害者は少数だけど、お年寄りには、皆、なる。数の上でも、介護保険の対象者の方が多いので、まかなう部分も広範囲になる。よって、一人当たりの使える金額は少なくなる・・・ということ、イメージがわきやすいだろうか。

「一般の人の中の障害者」(=ある意味特別)だったのが、「お年寄りの中の障害者」(=大多数の中の、ちょっと違う人)という風に、立場が変わるから、とも言えるかもしれない。

65歳。ここから先は、もう基本的には、誰でも必ず衰えていく。

どんどん歳を取って行って、弱っていくのは当たり前で、皆、多かれ少なかれ老化していくのだ。

それは、今まで元気だった人も、障害がある人も同じであり。

だから・・・、障害がある分、スタートから苦労は多かっただろうけれど、ここから先は障害があろうとなかろうと、程度の差こそあれ、例外なく誰もが不自由になっていくのだから、と。そういうことなんじゃないかなと思う。

ちょっと乱暴な言い方だけれど、若い人にはお金をかける。歳を取ってきたら、最低限は保険で助けるけれど、あとは自分自身の努力でやっていただき、そうして弱っていった最終的には死に向かっていくことは避けられないわけなので、と・・・。

障害があって、それは大変でしょうけれど、でも他の人も皆、大変になっていくのでね、と。

障害者で65歳以前からサービスを利用していた人たちは、介護保険に移行する年齢になることに非常に不安を持っている人が多い。

障害があって、介助がないと生活ができないのに。歳を取ったらもっと大変になるのに、どうしてサービスを減らされてしまうのか、と。

そういう話は、今まで現場で何度も聞いたことがある。

障害のサービスと、介護保険のサービスの使える量が違いすぎるという、今の法律がまず一番の問題。

それと、サービスを受ける側。多かれ少なかれ、9割の保険で援助が受けられることが、まずはありがたいと言う事を再確認して欲しい。

やってもらうことに慣れすぎていないか。できる限りの努力を、いつでもしてきていたか。

権利を主張するだけでなく、自分なりに、ほんの僅かでもいいから社会にとって何かの役に立つような行動をしていたか。

・・・ちょっと厳しいことを言ったかもしれない。当事者からは反発もありそうだけれど。

だいぶ脱線してしまった。

あと数ヶ月で65歳になる、Kさんの話に戻そう。

さて、Kさんである。

またちょっと話がややこしいのだが、実はKさんの場合のケースは特別で、腎機能障害は特定疾病にあたるので、65歳になる前からもうすでに介護保険には移行していたのであるが。

介護保険のサービスだけでは足りないで大騒ぎをして、それで特例みたいな感じで介護保険プラス障害者サービスの利用も認められていたとか、確かそんなような感じだった。

要するにKさんは、65歳になる前までは自分のワガママを通して、かなり優遇されていた。

性格や人格がアレだけに、行政も目をつぶるとか甘くせざるを得ないとか、大騒ぎされてしょっちゅう問題を起こされるよりは、ヘルパーさんに宥めてもらって機嫌よく、おとなしくしてもらった方が得策というか。

そのような判断がされていたんだと思う。

で、今度いよいよ65歳になるというときに。

障害福祉課や介護給付課、高齢支援課などでKさんについての会議が開かれたようである。

いくらなんでも、今まで通りのサービス量の支給はできない。他の人と比べて不公平だし、お金もだいぶかかっている。見直しましょうという結論になり。

それなので。

「Kさん、65歳になると皆、今までと同じようにはサービスが利用できなくなるんです」と、65歳になるのをきっかけにして、区の担当職員が話をしにいったようである。

しかし勿論、Kさんは拒否。今まで通り、大騒ぎで脅したり、威嚇したり。

でも、65歳になるこのタイミングでサービス量の見直しができないと、色々な面で行政的にも支障があったのだと思う。

行政は、今回は、Kさんの大騒ぎには簡単には折れなかった。

話がずっと平行線であり、それならば「ヘルパー派遣は一度いっさい休止します」という、宣言がされたのだ。

家事援助はもちろん、透析の送迎ヘルパーも全て休止。

そして、行政の示すサービス量で了承ということになれば、その時は新しい時間数でヘルパーを再開しますということにして、区役所の指示で、それまで入っていたヘルパー業者は一旦全て引き上げることになった。

Kさんがヘルパー利用をするようになってから数十年、こんなことは初めてだったと思う。

なので、必要ならば実費で誰か頼むなり、タクシーで透析に行ってくださいということである。

それで、Kさんはどうしたか。

透析の朝に迎えのヘルパーが来なくなると、Kさんは、透析に行かなくなった。

ヘルパーさんがいなくても、長年付き合いのあるタクシーの運転手さんに介助を頼んで車の乗り降りをして、それで病院に着いたら看護婦さんに車椅子を押してもらって・・・、というようなこともできないことはなかったと思うのだが。

しかしKさんはそうはせずに、ずっと自宅で引きこもることを選んだようである。

透析というのは、通常私たちが自動的に、血液をろ過したり不要なものを尿として排泄するといったことを機械が変わりにしてくれるわけなので、1日でも休むと、体にはだんだん毒が溜まっていく。

のだと思う。

だから一旦透析を始めると、多くは週3回、1回3～4時間くらいの処置を皆さん休まずに通院して受け続けることになる。

Kさんも、今までは休まずに透析に通い続けていたのだが。

ヘルパーを一旦全て休止するといっても、やはり行政は、そういう人がいる限り全く見放すというわけにはいかないものであり。ヘルパーが行かなくなってからは、区の職員が代わる代わる、電話をしたりたまには訪問して説得などを続けていたようである。

けれどもKさん、何と言われても頑なに拒否。自分のワガママが通らずに、意地になっていたのか、諦めとか、投げやりな気持ちだったのか・・・。

透析に行かなくなって13日後、Kさんは自宅で亡くなっていた。

区の福祉課の、困難事例を担当しているベテランの相談員さんが、朝透析に連れて行こうとした時に発見したようであった。

最後まで自分中心、ワガママ放題を貫いて、ちょうど介護保険に移行をする時期に亡くなったんだなあ・・・

と、その話を聞いたときには驚いたのだが。

自分で、選んだんだろうなあとも思っている。Kさんなりに、色々考えてのことだったのだろうと。

Kさん。あなたのお宅の仕事は、正直言って大変でした。

でも、Kさん宅の5年間の経験は、自分にとってはすごく有意義でありました。

Kさん宅でさせてもらった色々な経験（ほとんど苦労）を、今後自分は、誰かのためとか何かに役立つ方向に

生かしたいと思っております。

ありがとうございました。もう、怒ったりワガママを言わないで、向こうでは是非のんびりして頂きたいものであります。

—終—

Sさん宅で人生の終盤を想う（90代・女性）

私は障害者支援ヘルパーの仕事を主にやってきて、介護保険のヘルパーの仕事の方が経験が少ないため、「認知症」の人の実際の介護はほとんど経験がなく それはやや残念に思っている。認知症というのも、とてもとても簡単には書けるものではないのであるが。非常に思い出深いというか、忘れられないお宅がある。

いつも入っている登録ヘルパーさんがお休みになったので、臨時で、重度の認知症のSさん宅に何度か行くことになった。

Sさんは、自分の名前はかろうじて言えるけれど苗字は出ず、生年月日や年齢、日付や今の季節なども分からないというレベルであった。

お仕事の内容は、オムツ交換と食事介助を、ヘルパー二人で行うというもの。

本人には、介護をしてもらうという認識はなく。

オムツをしているということ自体も分かっていないようであった。

ところで何で、ヘルパーが二人必要なのかというと・・・。

抵抗が激しいのである。

オムツを換えましょうとお声掛けをしても、認識がないのだから当然拒否であり、手を払ったり足で蹴っ飛ばしてきたりするためひとりだけでは到底介助はできないのだ。

もうひとりが、体を押さえていないとならない。

つまり無理やり、力ずくなのである。

ご本人にはいくら説得をしたり説明をしても理解ができないんだから、こういうやり方でしょうがないのだと思う。

ケアプランにこのように介助をするとの明示がされており、そしてもちろん、家族も了承済みであった。

「なにをするの！」

手足をバタバタ、時々パンチがヘルパーにうまく入ってしまうこともあるので要注意だ。

そうしてここからが、自分が忘れられない、今でも時々思い出してはちょっと微笑んでしまう光景。

Sさんは、このオムツ交換時には、毎回毎回 大声で必ず同じことをおっしゃるのだ。

交換の最中の、Sさんのお決まりのセリフはこちら。

「たすけて～」

「だれか～」

（だんだん涙ぐみながら）

「おとうさ～ん」（既に亡くなっている）

「おまわりさ〜ん、〇〇町の1の2の3です、早くきて〜」

住所は、言えるのである。

知らない人が聞いたら虐待の現場か何かみたいなので、そのときには窓は必ず閉めている。

そうして毎度毎度、同じリアクションで面白いなあと・・・。

けっこう労力はかかるのだけど、介護をする側からすると、それはそんなにイヤな仕事ではなかった。

Sさんも、癒し系の部類の方であったのだ。

そんな風で大騒ぎをされながら、なんとか無事にオムツ交換の一通りは終了。

きっちりゴミの始末をして、換気のために窓を開ける。

認知症のかたのいいところというか・・・、

ひと段落すると、あれだけの大騒ぎをしていたのにSさん当人は、そんなことはもうすっかり忘れてケロッとしているのだ。

そして次は、食事介助なんだけど。

自分でだと食べこぼしてしまうので、ヘルパーが口まで入れる全介助。

もうひとりは、座っているときに体が傾いてこないように 今度は後ろから背中を軽く支えている

。

口元にスプーンを持っていくと、Sさん、このときには非常に素直なのである。

口を、ぱっくりとあけてくださる。

ぱっくり、もぐもぐ。ぱっくり、もぐもぐ。

・・・かわいいのだ。

コドモに戻ってしまったかのような表情。

人間の最期の頃というのは、生まれたばかりの頃の巻き戻しをするかのように、徐々に赤ちゃんみたいになっていくものなのかなあなんて、Sさんの口元にスプーンを持っていきながらしみじみと思ったものである。

ひろしの妻、Rさん（70代・女性）

臨時で訪問をした、印象的だったお宅の話をもうひとつ。

重度の精神障害で、ご近所でも有名な人とのことであった。

Rさんの、マイワールド。自分の妄想の世界の中で生きているような人だからお話にならないよとか、事前にいろいろな噂は耳に入っていたのだが。今回臨時ではあるが実際にRさん宅の仕事に入れることになり、自分はちょっとワクワクとしていた。

どんな人なのかしらと。

ところで私は、ヘルパーの資格を取る前には一時、障害者の作業所の仕事をパートでいくつか経験をしたことがあった。

身体、知的、精神障害の方との関わりは少しだけけどしたことがあったので、精神障害者に対しての偏見のようなものは自分の中にはなかった。

全く分からないと、過度に恐れたり警戒してしまうものだけけど。

犯罪を犯してしまうような異常人格者とか、社会に適応できずにしかるべき病院や施設で暮らしている方々は別だけれど、障害があっても何とか地域で暮らしている精神障害の方というのは、よっぽどのことがなければおかしなことにはならないということは分かっていた。

繊細で、色々と考えすぎてしまう人が多いように思う。

アタマの中に色々がありすぎて、自分の力だけでは心のバランスをうまく保てなくなってしまうような。

そんな印象を持っている。

怖いイメージは、全然ない。

なので、Rさんに会うことにも不安はなかった。

でも、Rさんとの出会いは自分にとっては強烈であった。

事務所から、チャリでチャリ〜っとRさんの住む団地に向かっていった。

あの棟かな。

すると、5階のベランダに、なにやら人がいらっしやる。

上半身裸。パンツ一丁。おじさん？

何か叫んでいる。

「うおおお〜〜〜〇※□＃＝＊☆山△」

あ、おばさん。おばあさんだ。

そう、それがRさんであった。

まあRさん、どうしたんだろう。いつもあんなのかなあなどと思いながら、階段を上がって玄関

前に来た。

表札は・・・、

「五木ひろし事務所」

と、なっていた。

まあRさん。ステキだ。

その表札をしばらく眺めてから、チャイムを押して訪問。

Rさんは、やっぱりパンツ一丁のハダカでおられた。

しかし気にしていない様子。

今日はお休みのヘルパーの代わりに私が来ましたよとお伝えして、さっさとおじゃまをする。

今日はこれからひろしが来ることになっているから困るだとか、なんか最初はちょっとしぶっていたが。

室内も、五木ひろし三昧であった。

ひろしさんが来るのなら、洋服はどれを着ましようかなどと言いながらとりあえず服を着てもらったり、このポスターはすごく良く撮れている、かっこいいですねえなんて話しかけながら、掃除などを進めていった。

ひろしのことを褒めておけばRさんはご機嫌なようであり、初対面である自分もすぐに受け入れてくれた。

片付けられないようで、食べたものは全て食べっぱなし、飲んだものも、使ったものも全てそのままの状態に室内に散乱している。

ヘルパーが週数回入っていたのでそこまでひどいことにはなっていないのだが、前回ヘルパーが帰ってからの2日分のゴミは、そのまんまあちこちに置いてあるという状態であった。

ゴミ屋敷初級、といったところ。

布団とかカーテンなんかがやぶけているんだけど、やっぱりRさんは気にならないようであった。できる限りの片づけをして、すぐ食べられるものの買い物をして冷蔵庫に入れると、あっという間に時間がきてしまった。

ひろしの応援をよろしくと、帰り際にはしつこくお願いをされた。

自分は五木ひろしの妻、という設定であった。

ベランダでハダカで叫んでいるのは近所迷惑になってしまうので良くないが、そういうことはまれであるとのことであった。

でもやっぱり、そんな人はご近所でも有名人。そうして、火の不始末などを心配されている。

(確かガスとかは、ヘルパーが入っているときだけ使えるように設定をされていたが。)

なのでRさんは、時々ヘルパーさんに来てもらいながら、ヘルパーと毎回楽しく「ひろしトーク」をして、日々、暮らしている。

そうして何とか生活は保たれているのだ。

治療とか服薬をしても、Rさんの妄想、ワールドは収まらないようである。

それならばRさん、過度に心的不安定になることのないように、これからもヘルパーさんに助けてもらいながら

ずっとこの団地で暮らしていくしかない。

ご近所になるべく ご迷惑をかけることのないようにね。

—終—

Eさんには、5,000円盗ったと思い込まれ（60代・女性）

「あらっ、1万円入れておいたはずなのに！」

・・・やってしまった。

買い物のお仕事から帰ってきて、レシートとおつりを出したときの、Eさんの第一声である。

預かったお財布の中には、5000円札が1枚入っていた。

そして3200円位の買い物で、おつりが1800円。確かそんな感じだったのだけど。

Eさんは、絶対に1万円入れておいた。おつりが5000円足りないんじゃないか、と言うのである。

買い物があるときには、Eさんは毎回、自分で専用のお財布にあらかじめお札を入れて用意をしてヘルパーを待っている。

そうしてその日は、お財布には確かに5000円札が入っていた。

しかし、うっかりした。ヘルパーになりたてのころの典型的な、初歩的な失敗である。

買い物に出掛ける前に、目の前で現金をお財布から出して「5000円ですね」と本人に確認をしてから行くべきであったのに、自分はそれを忘れてしまったのだ。

なのでEさんは、確かに1万円入れたはず、と・・・。

Eさんは腰痛の訴えが強く、週3回家事援助のヘルパーを利用していた。

神経痛、なので神経の病気＝そのために私は精神障害者手帳を持っているんだという認識を本人はしていたが、神経痛だけではその手帳はもらえない。

統合失調症かなにかだったと思う。あ、不安神経症とかだったかな。

でも日頃のEさんは、精神を病んでいる風は全くなく、いつも毅然とした態度でおられた。

もと教師だったそうだけど、そんなこととか、もともとの性格も関係あるようであった。

ただ、すごく気難しい方で、今まで何回もヘルパーを交代しているとだけ聞いていた。

なにかあるんだろうなとは思っていたが・・・。

毎週入るヘルパーの中で気に入った人とか、事務所の責任者なんかに対してはすごくいい顔をす
る人であった。

歓迎ムード。

その代わり気に入らない人がいると、かなり辛辣なクレームをつけていた。

自分はというと、Eさん宅に入るようになってからまだ数ヶ月であったが、苦情もなくまあまあ
気にいられていた方であったと思う。

しかしその、5000円ではなく、1万円だったと言われた事件。

それまでは自分にとってはEさんは、『やや神経質ではあるけれど、極めて常識的なご婦人』というイメージになっていたもので、そんな風に言ってくるとはと、正直かなり驚いた。

いや確かに5000円でしたから、勘違いですね～と押し通して、その場は何とか収めたんだけど。

でも私は絶対に1万円入れた、何度も何度も確認したし、としばらくはおっしやっていた。で、最終的には納得をした風を装っていたけれど、あれは多分、納得していなかった。あなた盗ったのね、でもまあいいわ。あなたも生活が苦しいんでしょうから。心の中では、そんな風に思っている様子が伝わってきた。

大変勉強になりましたよ。

お金のことってね。お互いにイヤ～なものである。

それ以来はどこのお宅でも、しつこいくらいにお金のご事は事前と事後に、何度も何度も本人と一緒に確認をするようになった。

そうやってひとつずつ、ヘルパーとしての経験値を重ねてきている。

なのでEさんのお宅での出来事も、やっぱりありがたかったと今は思う。

当時はそうとうびっくりしたし、気分も悪くなったけど。

被害妄想もある方の方であった。

盗った、盗られたというのもそうだけど、ヘルパーに対してのいろんな苦情が多く、ヘルパー交代だけでなく事業所ごとの交代も何度かしているとのことであった。

その後、私に対しての苦情はなく、そんなことがあってからも私は何ヶ月かはEさん宅に通い続けていたが。

Eさんの、別のヘルパーに対しての苦情が加熱してしまい、結局は事業所ごとお別れをする事になった。

事務所に、数分ごとに何度も何度も苦情の電話を掛けてきていた。

そのときの留守電に入っていたEさんの声は、別人のような恐ろしいすごみのある声であり、ご婦人のイメージは崩れ去った。やっぱり精神を病んでいる人の声だなあと感じたことが、今でも鮮明に記憶に残っている。

80歳で、両足を失ったFさん（80代・男性）（1）

Fさんには、申し訳ないことをしてしまった。

Fさんは、見るからに人のよさそうな、普通のおじいさん。

20年くらい前に奥様を病気で亡くしてからは、盆栽をしたり老人会の囲碁クラブに参加したりしながらひとりで気ままに暮らしていたようだ。

しかしある日突然、事故で両足の膝から下を失ってしまった。

これからはヘルパーさんに来てもらいながら生活をしていくことになりまして急に言われても、なにがなんだか、当初はまだイメージもわかかなかっただろう。

交通事故だったようだ。

命に別状はなかったものの、両下肢切断という大手術となった。

80歳で、両下肢欠損。

心的な混乱や苦痛などは相当なものであっただろうが、戦後の厳しい時代も生き抜いてきた世代である。

病院でのリハビリを淡々と続け、両腕の動きには問題がなかったこともありFさんは身の回りのことはおおむね自分でできるようになっていた。

そして退院にあたり、掃除と買い物、食事作りの援助でまずは週3日、ヘルパーが入ってみるといふケアプランになったのである。

Fさんのお話はしっかりとできて、認知症はない。多少の物忘れはあっても年相応な程度といったところであった。

座布団に座ってテレビを見ている様子は、どこにでもいそうな全くふつうのご老人。

しかしよくよく見てみると、実は両足の膝から下が痛い。そんな感じであった。

義足は、接続部分が痛いと言い、あまり使用していなかった。

室内はもっぱら、這っての移動をしていた。

来てもらってすまないねえ、と、訪問当初は特に恐縮しているような様子がみられた。

事故をする前までが自立していた人だったので、ヘルパーに手伝いをしてもらうことに対してはどうしても申し訳ないという気持ちが先に立ってしまうようである。

今まで介護保険料を払ってもらっていたということは、Fさんには、介護が必要な人をずっと支えてもらっていたということなんです。

なので今度は、遠慮なく制度にお世話になっていいと思います。困ったときはお互い様、助け合いましょうというのが介護保険制度なんですよ、ということ、私はことあるごとにちょこちょこ説明をしていた。

ところで障害者というのは、全体的にやや変わっている人が多いように思うのだが（全ての人がそうということではない）、

Fさんのように、なんらかの事情で途中から障害者になられた人（中途障害者）は、それまでの数十年間は障害とは無縁の、私たちと同じ生活をしてきているので 感覚も私たちととても近い。

「常識的」な人が多いと思う。

そしてFさんは がんばりやさんであり、迷惑をかけたくない、できることは自分でやりたいという気持ちが強い人であった。

室内の目的の場所に行くときには、今までのようにささっと歩いて行くことができなくなったのが、一番違うところである。這って動くために、移動の時間は倍以上かかるようになった。

それと、高さのあるところへの移乗（乗り移り）も、やや大変である。

床からベッドであるとか、トイレの便座などへ移る際には少し苦勞をする。

踏み台を設置しており、そこに一旦登ってから、目的の場所に乗り移る必要があった。

だからトイレの便座に座る動作なんかは、きっとけっこう辛かったんじゃないかと思う。

でもFさんはトイレでの排泄は自立しており、シャワー浴や洗身なども全て独力で行ってた。

身体介護の必要はなく、私たちは最低限の家事の手伝いだけをしていた。

台所も高さがあるので、さすがに調理は独力では難しく、かといって毎日お弁当やレトルトでは栄養状態が心配なので、週3日はヘルパーが食事作りをしていた。

多めに作って、冷蔵庫にも入れておいたり。

Fさんはそういう人であったので、この間のあれはおいしかったありがとうとか、またあれを作ってほしいとかことあるごとに嬉しいことを言ってくれるので、ヘルパーも楽しく仕事をさせてもらっていた。

ヘルパー利用を始めてから、数ヶ月が経ち。

Fさんも私たちも、だいぶ生活のリズムに慣れてきたような実感があり、自分はFさん宅に関しては特に何も問題はないように思っていた。

順風満帆。

Fさんはしっかりした人だったので、なにか困ったことがあれば自分から言ってくるだろうというような、ちょっとした油断もあった。

今思えば・・・。

Fさん（2）

ヘルパーが訪問している時間はFさんは、たいてい座ってずっとテレビを見ていた。

時代劇や、国会中継など。

政治のことなどにも詳しく、自分は色々と教わる部分も多かった。

ところで、「政治と宗教の話には要注意」というのは、どんな職種であっても多分そうであろう。

ヘルパーは、自分が信仰をするのは自由であるが利用者さんを勧誘したりすることは勿論ダメである。

そうして利用者さんの方が特定の宗教を信仰していたとしても、過度に反応をしたり必要以上に興味を持つような姿勢にならないように気をつけたいものである。

お友達同士ではなく仕事上のつきあいであるので、そこはさらっと。深入りしない。

Fさんかというと、特定の政党に肩入れしているような様子はなく、特に信仰もしていないようであった。

極めて常識的というか、一般的な感覚で国会でのやりとりの感想などを述べられるので、自分も安心して分からないことの質問をしたり教えてもらったりしていた。

宗教に関してもFさんは、それぞれ良いところもあるけれども結局は誰かが助けてくれるわけでもない、自分自身がどうにかするしかないという見解であった。

実は自分もかねてから全く同じような考えであったので（私が信じているのは自分＝「自分教」なのだ）、Fさんとはそういう面ではちょっと意気投合したりもしていた。

そんな風に、楽しくトークをしながら調理などの援助を進めていたのであるが。

ヘルパーの訪問中は、そんな風にお話はするけれど、Fさんが動くことはあまりなかった。

たま～に、「ちょっと失礼」と言い、トイレまで這って行くぐらい。

足がそういうことなので、やはり動くことはなかなか億劫なようであった。

生活に必要なだいたいのは、普段Fさんが座っている座布団の周り、すぐ手の届く場所になんでもうま～く配置されていた。

レンジとトースター、事務用品は左側のすぐそばの棚に。

右側には、ウエットティッシュとポリ袋の小。コロコロ。ゴミ箱。

頭はしっかりとしていてがんばり屋、両腕の動きには何の問題もないFさん。

掃除くらいは自分でできるからと言い、私たちには頼むことがなかった。

お話をしながら、私たちが調理をしている間に自分の周りはコロコロで簡単に掃除をしていた。

それに実際、買い物に行ってから調理となると時間には余裕がなく、私たちは台所の床を最後

にちょっと拭く程度しかできなかったのである。

入浴や排泄は自立しているFさんであるが、それでもさすがに風呂掃除は大変なのは、と自分は何度かFさんに「やりましょうか」と声をかけたことがある。

しかFさんは、これだけしてもらって本当にありがたい、掃除は自分でできるからと言いつつも断っていた。

浴槽の内外にも踏み台のような用具などを取り付け、独力で浴槽出入りもできるように工夫がされていたが。

Fさんはもともと長風呂はしないタイプだったとのことで、シャワーですませることがほとんどであったようだ。

なので、浴槽は汚れていないし洗い場も腰掛けて自分で時々タワシでこすっているので大丈夫とのことだった。

トイレ掃除を頼むなんて、もってのほか。

そんなことまでお願いしたら、ほんとうに申し訳なくて顔向けできない。自分でできるから、ということだった。

Fさんは、移動をするときにはたいてい手をついて這う姿勢だったけど、膝立ちの姿勢にもなることはできたので、まあトイレ掃除も膝立ちの状態で行うことは可能だなと自分も判断した。

それになによりも本人がそんな風に恐縮をされるので、こちらとしても無理矢理掃除をするまでにはならなかったのである。

更に数ヶ月が経ったころ。

自分の思い過ごしかもしれないが、Fさん、このところどうも元気がないというか、若干顔色も悪いような気がしていた。

受け答えはふつうだし、血圧などにも大きな変動はない。本人も大丈夫と言うから、そのままなんとなく過ぎていったんだけど。

季節の変わり目だからかなとか、障害を受容したかに見えてもまた受け入れられなくなったりと、気持ちの面で行きつ戻りつというのは誰にでもあることなので、そんなところなのかななんて自分は思ったりもしていた。

膝は、痛いようであった。

移動時にどうしても痛めてしまうようで、痣ができたり、ひどいと水ぶくれのようなものができることもあった。

サポーターをしたり、訪問看護師が入って膝の傷の処置をすることもあった。

痛くて大変そうだなあとは、思っただけなのだが……。その時点で、自分をもっと想像力を働かせるべきであったと、今思うと悔やまれる。

そういえば、Fさんが動くところをずいぶん見なくなっていた。

以前はたまにトイレに立つことがあったが、この頃はヘルパー訪問中は、終日じっと座布団に座っておられる。

やはり体調が悪いんじゃないだろうか……。

決定的な何かがあるわけでもなく、そのままどんどん時は過ぎていったのだが。

ある日、決定的な出来事が起きた。

きっかけは、全くの偶然であった。

ところでヘルパーは訪問前には、事前にどこかでトイレはすませていくものである。

訪問をした先では、なるべくトイレは借りない。普通はそういうもの。

しかしその日は自分は、どういうわけかFさん宅での工作中、どうしてもトイレに行きたくなってしまった。

その頃はもうFさんとはだいぶ気心も知れており、自分は軽い気持ちで、Fさんに、おトイレを借りていいかと申し出たのであるが。

Fさん、激しく同様をしておられる。

汚れているから、駄目だと……。

あら？

自分はよそのお宅では、今まではそんな風に言われたことはなかったので正直ちょっと驚いた。基本は事前にすませるようにしてはいても、どうしてもお借りすることもある。そうしてそんなときは皆、普通に「どうぞ」と言ってくれるものなのであるが。

汚れていて、恥ずかしいのかな。

でも、汚れているということであるならばそれはFさんが、トイレ掃除はやはり独力では大変であるということでもある。

それならばこれはいい機会だと思い、では私がトイレ掃除もしますからと、自分は半ば強引にトイレのドアをあけてしまった。

するとそこには、見たことのない光景があった。

Fさん（4）

トイレのドアをあけると、

中央の洋式便器の周り、トイレの床一面に・・・、ふくらんだポリ袋（小）が、100コぐらい、所狭しと置かれていた。

尿1回ぶんが入っていて、きっちりと上部を結ばれている、ポリ袋の小である。

一瞬、驚いた。

数十秒、驚いていた。

申し訳なかった！

私はやっと、状況を理解した。

膝が痛いこともあって、毎回のトイレまでの移動が大変になっていたんだろう。

床からトイレへの乗り移りの動作も、辛かったんだろう。

なのでFさんは、徐々にトイレには行かなくなっていたんだ。

座布団に座ったまま、ポリ袋に排尿をしていたのである。

それでポリ袋がいくつかたまると、あとで捨てようと思いとりあえずトイレに運んで置いておいた。

また、あとで捨てようと思い、運ぶ。

それを何度も。

そうしてあとであとでと思いながら、次第に尿が入ったままのポリ袋が、トイレ内にたまってしまったんだろう。

Fさん、自分でも、ここまで来るとどうしていいか分からなかったんだと思う。

最近顔色が悪かったのはこのためだったのだと、私は確信した。

たまっていく自分の尿袋に、心が押しつぶされてしまっていたのである。

気づかなくて、本当に申し訳なかったという気持ちで一杯であった。

大量のポリ袋を見てしまって数十秒はフリーズしてしまった自分であるが。

いつまでも、こうしているわけにはいかない。

ほとんど何も考えずに、Fさんにそのまま言った。

トイレまで行くのが大変になっていたんですね、これどうしましょうか、と・・・。

Fさん、自分で片付けるからとおっしゃる。

その日はお互いに、カオを直視できなかった。

でも大変でしょう、私がやるからとかモゴモゴと自分は言い、すぐにどうこうできる量でもなかったなので私はその日は、とりあえずそのままFさん宅は辞した。

そういえば、自分の尿意はどこかにふっとんでしまっていた。

Fさん（5）

あ～Fさんごめんなさい気づかなくて、あれどうしようと、自分はほとんど涙目になりながら暫くはそのことしか考えられなかった。

帰り道でチャリをこぎながらも、目の奥にはオシッコ袋100コの映像が焼きついていた。そしてそれは数日は消えることがなかった。

事務所に帰ってすぐに、ケアマネージャーに相談した。

そうして話し合っ、ここはひとつ、オオゴトにするのはやめようということになった。

Fさんの様子から、他の人も介入してあれこれと騒ぎにするのは良くないであろうと。

なので私が、あのオシッコ袋の処理を全面的に仰せつかった。いや、自分から志願をしたのである。

自分が見てしまったのだから、自分がどうにかするのが一番であろう。

それに、何とかしたい、しなければならないという気持ちしかなかった。

そうして翌週の、Fさん宅の訪問日。

私はトイレ内がそのままになっているのを確認後、Fさんに、今日は自分があれらの片付けをするということを宣言した。

有無を言わず、である。

Fさんが自分で始末をすると言ってはいたが、現実にはもうとうてい無理な話であった。量が、ハンパなくなっている。

持参した手袋と、使い捨てのエプロンを装着。ハサミは、Fさんにお借りした。

そうして締め切りだとFさんが不安になると思い、トイレのドアは開けたまま作業をすることにした。

作業自体は、単純である。

オシッコ袋ひとつを、便器の上にかざす。

口はきっちりと結んであってほどくのは困難なので、上の方を、ハサミでちょこっと切る。

尿を、便器に捨てる。

尿を捨てて、しなっと湿ったポリ袋は、別のゴミ袋へ。

また次のオシッコ袋を、便器の上にかざす。

ハサミで切り、尿を捨てる。

以下、繰り返しである。

しかし、100コくらいある。

単純であるが、あとで腰とか肩とかが痛くなるほどの重労働であった。

人間の尿というのは、排泄物、不要なもの。

やっぱりすぐに、トイレに流すという行為は理にかなっているんだなあなんて思いながら作業を進める。

ずっととっておくようなシロモノではやはりないのである。

マイナスの、気というか。

どよ〜んとしてるのだ。トイレ内の空気が。悪いもので充満されていたというか・・・。

気疲れもする作業であった。

しかし地道に作業を進めていくうちに、尿入りのポリ袋は着々と減っていった。

尿を捨てた後の、ちょっと濡れてしなっとペチャンコになった方のポリ袋が、徐々にたまっていく。

1時間ちょっとで、全ての尿を流し切ることができた。

ひとまず、ほっとする。

ペチャンコのポリ袋が、意外とかさばっていた。

重くって、濡れた袋というのは数が多いと存在感があるなあなんて、これも初めての発見であった。

嚴重に封をして、燃えるゴミとして処分した。

便器と床の掃除もして、きれいになって終了。

よかった。すっきりした。

そしてその日もあまり自分とFさんは目を合わせられないまま、またひとまずお宅を辞したのである。

その後。

次の訪問日にも、なるべくいつも通りの感じで自分はFさん宅におじゃました。

そして基本は通常通りの仕事、また買い物と調理を行ったのだが、自分は買い物時にドラッグストアでしびんを買って来るとFさんに申し出た。

これもまた、ほぼ強引にであるが。

何らかの事情でトイレまでの移動が困難な人は、しびんを利用することが多い。

昼はトイレまで行き、夜はベッド上でしびんを使用、という人もいる。

Fさんはその後は、しびんを使用するようになられた。

しびんに何回分かの尿が溜まると、それをトイレまで捨てに行くことは独力でできていたようだ。

そして自分は、それからは時々トイレ掃除もさせてもらうようになった。

許可は得ずに、もう、掃除しますね～とだけ言ってやってしまう。

Fさんももう、トイレ掃除は自分でできるとは言わなくなり。

トイレ内に、ポリ袋が出現することもなくなった。

そのうちに、風呂場のスノコなんかもヘルパーが掃除をするようになり。

ヘルパーの入る時間や日数も少し増えた。

しかし、後で分かったことなのであるが、トイレまでの移動が不自由なためにポリ袋に排尿をしたり、または空きビンや空き牛乳パック、ゴミ箱などに排尿をしている人というのは時々いるようである。

そしてそういう人はなぜか、しびんの使用を拒否されることが多かったりもする。

いずれにしても、「トイレで排泄をする」ということは私たちには何でもないことであるが、障害があったり、介護が必要な人にとってはとても苦勞をされる場合もあるということなのだ。

今回はFさんは、トイレまで行くのが大変になっていたのにそれを悟られまいと、ヘルパーが入るときには尿の袋を目につかないトイレ内に隠しておられたのでやや発見が遅れてしまったというわけなのだが。

排泄のことなんかは特に、困ったり不自由をしていてもなかなか自分からは言い出せない人もいることがよくわかった。

可能な限り、できることは自分でやらしてもらわなければならないのであるが。

どこまでが本人に任せてよくて、どこからは介助が必要かという見極めは、毎週顔を合わせるへ

ルパーがもっと気をつけてさりげなく観察をしなければならないなあと思った次第である。

Fさんは、また徐々に顔色が良くなってきたように思ったのだが、自分の思い過ごしかな。

後日談。

「ワイロの苦惱」については以前何度か書いたことがあるが、ポリ袋大掃除の件があって1ヵ月後くらいだったろうか。

Fさんが、コレ貰ったんだけど自分は食べないからと言い、自分になにやら下さった。

某有名老舗店の、高級そうなようかんの詰め合わせであった。

実は自分は洋菓子党であり、和菓子は全般苦手なのであるが。

例の件のお礼ということなんだろうな、とすぐにピンときた。

勿論基本は貰ってはいけないし、食べれないからいらないのであるが・・・、

しかしこれは私は、断れなかった。

喜んで、ありがたく頂きますと言い、持ち帰った。（そうして実家の母にあげた。）

このときのようかんも、貰えないことになってるからと言い断ったほうが良い部類のものだったと思われるだろうか。

他のヘルパーさんなどに聞いてみたいところである。

ヘルパーの苦悩

<http://p.booklog.jp/book/99134>

著者 : LISA

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mhw-sun-04/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99134>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99134>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ